



制作：慶應義塾大学公認学生団体S.A.L. あじさいプロジェクト

発行：環境省 福島地方環境事務所

2022年3月 発行



環境省

-伝えたい大熊の記憶-

石田キミ子さん
志賀正典さん
永井文成さん・永井ミネ子さん
末永精一さん
武内弘さん・武内都さん
松本光清さん・松本緑さん
宗形和子さん
吉岡三重子さん
石橋英雄さん・石橋裕子さん
鎌田清衛さん
木村紀夫さん
松永秀篤さん・松永妙子さん
鈴木孝子さん・鈴木真理さん
滝本眞照さん・滝本英子さん
栃本さちえさん
渡辺信行さん

架け橋



はじめに

2019年10月、私たち”あじさいプロジェクト”は、福島県大熊町に暮らしていた方々への聞き書き活動を始めました。

2011年の東日本大震災、そして東京電力福島第一原子力発電所の事故以降、現在も多くの地域で立ち入りが制限されている大熊町。町の一部は、除染作業に伴って発生した除去土壌などを貯蔵する、中間貯蔵施設となりました。その用地の提供のために、やむなくかつての自宅を手放されたという方もいらっしゃいます。この原稿を書いている時点で震災から10年以上が経ち、町内には新しい町役場や住宅が建設されるなど、復興が進んでいる部分もありますが、既にかつての街並みが失われてしまった場所も少なくありません。

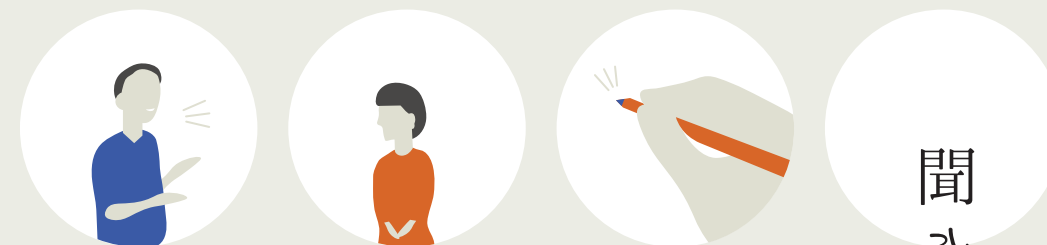
私たちは、そんな大熊町の震災前の様子や、そこに暮らしてきた方々の営みを、聞き書きを通して記録し伝承していきたいと考え、この活動を始めました。この冊子は、これまでに聞き書きという形で伺ってきた、大熊町に暮らしていた方々のお話の一部を、私たちが文章の形にまとめたものです。

これまで2年以上にわたって続けてきた私たちの活動は、お話をしてくださった大熊町の皆さんはもちろん、会場の確保や話し手との調整の面でご協力いただいた環境省や環境再生プラザ、福島復興に取り組むNPO法人元気になるう福島の皆さん、そして大熊町訪問の際に温かく受け入れてくださった渡部千恵子さんなど、多くの方々に支えられてきました。活動が一つの節目を迎えたいま、私たちの活動にご協力いただいた皆さまに、改めてお礼を申し上げたいと思います。

この聞き書き活動を通して、私たちは震災前の大熊町の様子を未来へ伝える架け橋、そして大熊町のことを日本全国の人に伝える架け橋になりたいという思いを持って活動をしてきました。この冊子の名称「架け橋」にも、同じ思いが込められています。その名前に込められた思いのように、この冊子を通して、一人でも多くの方に大熊町の様子や魅力を知っていただき、大熊町の抱える負担や課題を自分のこととして捉えていただければと思います。

大熊町と、この冊子を手にとってくださった皆さんの間に、たくさんの橋が架かることを願い、この冊子を送り出します。

慶應義塾大学公認学生団体S.A.L. あじさいプロジェクト



<聞き書き>

聞き書きとは、ある土地の方々からお話を伺い、そのお話を文章として記録に残し、世代を超えて継承していく取り組みのことです。聞き書きの手法では、話し手のありのままの言葉を尊重して、その語り口を活かしながら、話し手の言葉だけで文章をまとめます。話し手の言葉に、私たち(聞き手側)の解釈を加えたり、わかりやすく言い換えたりはしません。

聞き書きという手法の特性上、本冊子には、
話し手のありのままの言葉をそのまま残して要約した文章を掲載しています。
そのため、以下の点に注意してお読みください。

1. 本冊子に掲載されている店舗、施設の再開状況や、話し手の方の避難状況、お住いの場所などは、全て聞き書きを行った時点での情報となります。
2. 話し手のお話の内容自体も、あくまで聞き書きを行った時点の状況を前提にしたものであるため、一部現在の状況とは異なる場合があります。
3. 同様に、掲載している文章内の「いま」や「現在」など時間に関する表現も、あくまで聞き書きを行った日を基準とした表現となります。
4. 掲載している文章内における事実や出来事の認識、あるいは震災・原発事故の被害、復興関連事業、行政の対応などに関する記述は、あくまで話し手の皆さんの視点や記憶に基づくお話となります。

発行によせて

このたび、「架け橋」と題した、大熊町の皆様の聞き書き冊子を発行できたことをうれしく思います。

話し手の方々をはじめ、ご協力いただいた皆様には感謝申し上げます。

本プロジェクトは、2019年に慶應義塾大学の学生と環境省が、新しいまちづくりが進む大熊町において、町の皆様のお話をふるさとの記憶や歴史の証言録として、多くの方々にお伝えしていければとの思いで始めました。

話し手の取材、聞き書きとしての一人称の形での文章のまとめ、コラムの作成、冊子のレイアウトに至るまでの制作の全てを、学生の力で進めていただきました。

聞き書きという手法により、語られた、ありのままの言葉を尊重して文章がまとめられています。これによって、柔らかで温かな表現の、それでいて話し手の皆様の率直な思いが伝わる冊子になったのではないかと考えています。

お話を伺えたのは大熊町の方々のごく一部であり、また、お話しいただいた内容の中で冊子として掲載できたのもごく一部です。お届けできなかったお話の中にも、本当にいろいろな大熊町の風景、記憶があったはずです。

いま、当事務所では、特定復興再生拠点における除染や建物の解体、中間貯蔵施設の整備や、中間貯蔵された除去土壌等の福島県外での最終処分のための減容・再生利用の推進といった取組を進めています。

あらためて、この地域のかつての風景や豊かな営み、そしてそこで暮らしていた方々の気持ちに思いを致し、しっかりと事業に取り組んでまいりたいと考えています。

このたび冊子となりました本誌を一人でも多くの方に手に取っていただけることを願ってやみません。

環境省 福島地方環境事務所長 秦 康之



目次

- 1 はじめに
- 2 聞き書きとは
- 3 発行によせて
- 4 目次
- 5 大熊町とは

聞き書きの記録 2020年1月18日

- 7 いしだきみこ
石田キミ子さん
震災当時は大川原地区に居住
- 11 しがまさのり
志賀正典さん
震災当時は熊地区に居住
- 15 ながいぶんせい みねこ
永井文成さん・ミネ子さん
震災当時は夫沢地区に居住

聞き書きの記録 2020年1月19日

- 19 すえながせいいち
末永精一さん
震災当時は熊地区に居住
- 23 コラム
大熊町への避難指示と復興への歩み

聞き書きの記録 2020年11月29日

- 25 たけうちひろし みやこ
武内弘さん・都さん
震災当時は下野上地区に居住
- 29 まつもとこうせい みどり
松本光清さん・緑さん
震災当時は熊川地区に居住
- 33 むなかたかずこ
宗形和子さん
震災当時は熊地区に居住
- 37 よしおかみえこ
吉岡三重子さん
震災当時は小入野地区に居住

- 41 くまがわちごししまい
コラム 熊川稚児鹿舞
- 42 コラム 大熊町の農林水産業

聞き書きの記録 2020年12月6日

- 43 いしばしひでお ひろこ
石橋英雄さん・裕子さん
震災当時は熊地区に居住
- 47 かまだきよえ
鎌田清衛さん
震災当時は小入野地区に居住
- 51 きむらのりお
木村紀夫さん
震災当時は熊川地区に居住
- 55 まつながひであつ みょうこ
松永秀篤さん・妙子さん
震災当時は熊川地区に居住
- 59 コラム 中間貯蔵施設

聞き書きの記録 2020年12月20日

- 61 すずきたかこ まり
鈴木孝子さん・真理さん
震災当時は下野上地区に居住
- 65 たきもとまさてる えいこ
滝本眞照さん・英子さん
震災当時は下野上地区に居住
- 69 とちもとさちえ
栃本さちえさん
震災当時は小入野地区に居住
- 73 わたなべのぶゆき
渡辺信行さん
震災当時は夫沢地区に居住
- 77 あじさいプロジェクトについて
- 78 全体編集後記

福島県双葉郡の大熊町は、太平洋に面する「浜通り」地域の真ん中に位置し、温暖な気候に恵まれた自然豊かな町です。1954年に大野村と熊町村が合併し、「大熊町」となりました。面積は78.71平方キロメートルで、東京都渋谷区の約5倍です。梨やキウイフルーツなどの果物や、鮭などの水産物が町の名産として知られています。

大熊町 とは

そんな大熊町は、東京電力福島第一原子力発電所の1号機から4号機の所在地であり、2011年3月11日に、東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故が起きた場所です。事故が発生した3月11日時点では、11,505人が大熊町に住んでいましたが、この事故の影響で住民は各地への避難を余儀なくされました。

その後約8年間にわたって、大熊町の全域に避難指示が出されていましたが、2019年4月に、町の一部で避難指示が解除されました。これを受け、現在は大川原地区に役場機能が戻り、新しいまちづくりが進められています。2021年12月1日時点で、大熊町に住民登録のある町内居住者は356人、住民登録がない居住者を含めた町内の推計人口は923人です。

聞き書きに登場する福島県内の地名



国土地理院の地図を参考に作成



ISHIDA KIMIKO

石田キミ子さん

お話をしてくださる石田さん (2020年1月)

2020年1月18日、福島県田村市にお住まいの石田キミ子さんにお話を伺いました。石田さんは震災前、家族七人で暮らしており、旦那様とともに椎茸の栽培をされていました。震災後は千葉県や長野県に避難された後、福島県内での生活を再開されました。石田さんの震災前の暮らしや大熊町に対する思いについて、お話ししていただきました。

30年程前は椎茸を1万本ぐらいやっている椎茸農家だったんです。他にも豆や米も作っていたから、その三つを合わせて、あと塩さえ買えば生活にゆとりができるかなと思って。そして、これらを組み合わせたら美味しくなるんじゃないかなという発想の転換で(しいたけ味噌づくりを)始めたんです。椎茸の分量や塩の加減など、約5年の試行錯誤を経て、販売するに至りました。

そして、「しいたけ味噌」として町の特産品にさせていただいたんです。町や農協の人にも手伝ってもらって、東京には年間5〜6回販売に行きました。そのおかげで本当に沢山のの人に注文していただいていた、関東地方からが一番多かったですね。地元でも宣伝したりして、1年に5トンの味噌を作って販売していました。これだけでは物足りなくなって、調理師の免許、味噌の製造の許可証などを取得して、ふきのとう味噌、ゆず味噌、青唐辛子味噌などさまざまなものを販売していました。

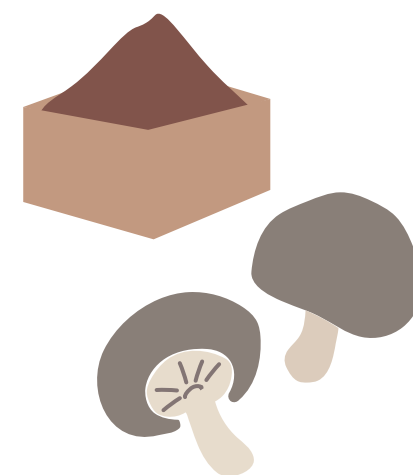
各地を転々とした避難生活

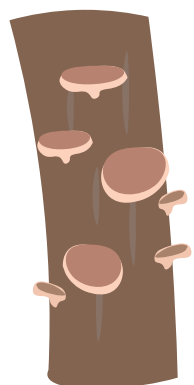
震災が起きた時は、大川原にバスが来たんです。すぐに帰れると思っていたから、車で向かいましたが、バスに乗ることになって、手提げ一つで乗り込みました。そして、なんとか(田村市)船引(ふねひき)の石森小学校の体育館に行って、しばらくして妹が三春にいたので電話したんだけど、通じないんだよね。でも次の次の日に見つけてもらって、三春の妹の家に行ったら、妹の家には親戚のみんなが23人ぐらいいて。重なるようにして寝て、そこで旦那と1週間過ごしました。

次に娘が千葉にいるのでそこに移動しました。そこは、孫の大学受験生がいて。なんだか気を使うからと、長野の小諸にある娘の旦那の家に行こうと言われて、自分の次男坊とかとみんなで行ったの。でも孫は学校だから会津に戻って、私も1年7ヶ月小諸にいたあとは会津に4年ぐらいいて、そして今は船引にいます。6回目でやっと落ち着きました。

オリジナルの「しいたけ味噌」

原発事故があって、いろんなものを片付けるという時に、次の(しいたけ味噌の)製造のために空けておいた箱なども全部捨てたの。もう何も食べるものはダメだと言われて。あの捨てる時の悲しさ。沢山の商品を作ってきて、その分多くの人が携わってくれたりしていて、それが本当に生き甲斐でした。





他に町内や双葉でしいたけ味噌をやっている人はいなくて、いわば私のオリジナルなんです。だから、残していきたいという気持ちがある。姪っ子がいて、今群馬の食の大学に行っていて、「おばちゃん、もし卒業したら、しいたけ味噌教えてもらおうかな」と言っています。他の町からも教えてと頼まれたり、人づてに言われたりしました。でも、今まで大熊町でやっていたものを別の町に教えるというのも嫌だし、私たちが試行錯誤してやったのに、と思って。ただ姪っ子とかがやりたいと言うなら、そういう人には教えてあげたいなと思って、楽しみにしています。



大熊町の特産品“しいたけ味噌”のチラシ（2020年1月）

おうちが国の登録有形文化財に

椎茸は家の上のほうにある杉山に木を立てて作っていたんですけど、ちょうど収穫できる年が震災でした。東電の人も見に来たけれど、しばらく放っておかれていたから、「椎茸ってこんなふうになるの?」とびっくりしていました。東電の方が補償するのに何本あるか(椎茸の)木を数えるので、行こうとしたら、(線量計が)ビービー鳴っているから何かと思いました。椎茸はすごく放射能を吸うんですって。

一方で、母屋と土蔵(どぞう)と門と粃蔵(もみぐら)*は釘を1本も使っていない珍しい建物で、(国の登録)有形文化財に指定されたので町に寄贈しました。町でどうしてもいいから使ってくださいと。壊されるよりはいいと思って。

文化財として指定されたというのは、それは今後に残っていくということかなと。国の人や文化財に関わっている人が来て、「これは残しておいてください」と言われたから、「ああ、良かった」と思って。私も残してもらって良かったし、うちが18代まであそこで生まれていて、今高校生の子が18代目なので、そういう意味でも土地は売りたくない。町は「売ってもらいたい」と言うけれど、土地だけは自分のものであってほしい。

*粃蔵:主に江戸時代に利用されていた、凶作に備えて米を粃のままで貯蔵するための蔵。

地元福島への思い

福島にはやっぱり戻ってきたかった。(避難先の)長野にいてもほとんど知っている人はいないでしょう。だけどみんなが救う会みたいなものを立ち上げてくれて、衣類とか、いろいろ持ってきてくれて、弁当も朝昼晩と。でも気の毒だから、「いいです、自分でもできます」と言って断って。家族11人で長野にいて思ったのは、今まで本当にあんなに忙しくてバタバタ動いていてしんどくても、何もしないのはもっとひどい。朝昼晩と弁当が来るから何もすることがない。だから、お父さん(旦那様のこと)もうつ病みたいになって。今までいろいろ町の仕事などをやっていたのに、何もなくなったから。そんな生活をしてきました。結局長野にいた(避難していた家族)みんなは、バラバラではあるけれど、長男・次男家族は福島に戻ってこれました。

編集後記

石田さんのお話を通して、震災前の暮らしがいかに充実したものであったか、そしてその生活から多くのつながりが生まれていたことがわかりました。震災によってその生活が一変し、今まで大切にしていたものが奪われた時の感情は私たちの想像を超えるものであり、だからこそこの思いを伝えていきたいと思いました。

(編集:松本彩花)



お話をしてくださる志賀さん (2020年1月)

2020年1月18日、福島県楡葉町にお住まいの志賀正典さんにお話を伺いました。志賀さんは震災前、梨や稲を育てながら、和牛の飼育もする複合経営をされていました。震災後は除染作業にも参加された後、楡葉町で再び販売用の牛の飼育を始められています。また、市場出荷をしない、放射線量のモニタリングのための梨の栽培を大熊町*で行われています。

*放射線量のモニタリングのための梨の栽培は、聞き書き実施後、現在は楡葉町に場所を移して行われています。

震災までの志賀さんの歩み

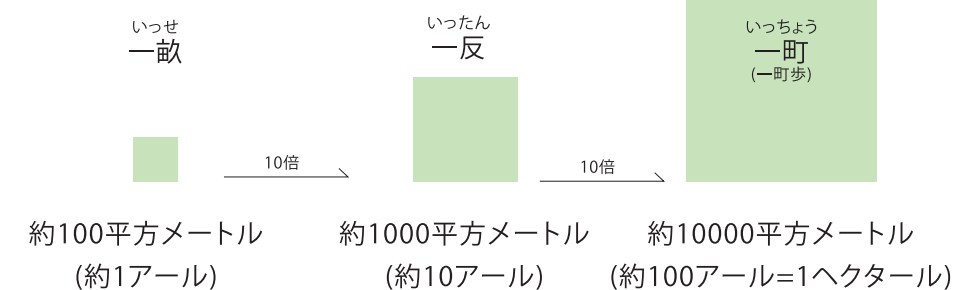
震災前は主に農業。果樹園の梨園と、田んぼが面積としては15町歩。そのうち12町歩が牧草。稲作は3町。そして黒毛和牛の繁殖牛*が23頭。果樹園と繁殖牛と水田の複合経営。

うちはそもそも果樹専門だった。小さい時は、うちの親は桃と梨をやっていて、日金を取ると言って後からみんな酪農の乳搾りをしていた。それを段々に梨畑を拡げて酪農をやめたり、果樹園の肥やしを取るのに和牛をやっていて。

私が高校になってから、親が(農作業を)できなくなって。高校の頃は酪農で乳搾りで、朝に搾って高校まで電車で行って、いくら手をきれいに洗っても糞臭くなる。プーンとニオイがして、これに嫌気がさして(臭いが付きやすい酪農から)和牛の飼育に変えた。

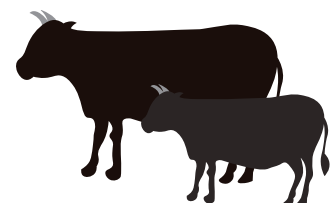
*繁殖牛：子供を産ませるために飼育されているメスの牛

面積をあらわす農業用語の単位



(家族で生活していくには、)梨というのはその年その年で変動がありすぎる。台風が来ると10万、100万単位でみんな落ちるから。その頃は母もいたので、三人で生活するには農業一つでは足りない。これは牛の方が安定しているなということで、段々梨畑を縮小して、牛小屋を立てて、5頭ぐらいの牛から繁殖牛を増やしていった。

震災後の志賀さんの生活



震災後、東京の娘のところに1年。ちょうど孫が小学1年に上がる20日ぐらい前にボコンとなって(震災が起きて)、娘のところに世話になった。日野市というところに。それから震災後1年が過ぎて牛の安楽死を、建設業者が請け負って。そうしたら牛を扱っている人は(その建設業者には)誰もいない。そこで安楽死をするのに、手伝ってくれということで東京から帰ってきたというのが、そもそもの(福島に戻ってきた)縁。

そのうち大熊町の先行除染*があつて、草を刈ったりなんだ。それで除染を請け負った建設業者で機械を使える人を探していて。今一緒にここで和牛をやっている人が2年ぐらい前に楡葉で(除染作業を)やっていて、今度大熊で誰か紹介してくれないかということで、私は大熊なら協力するということで先行除染と本格除染とをやって。

*先行除染：放射線量を下げるための本格的な除染作業(本格除染)の前に行われた、作業の拠点となる施設や道路などを対象とした除染のこと。

それでうち(志賀さんの自宅周辺)のところは除染はいつ始まるのかと言っていたら、「5年後に検討する」と、「何かの目的があれば除染しますよ」ということで、それじゃおかしいでしょうと。除染が終わらない限り復興はしないと。除染も終わらないところもあるのに、復興復興と騒いでいる時代じゃない。

除染の完了を待っていても埒(らち)が明かないので、自分の好きな仕事を再開しようと思い、牛を飼った。今年(2020年)は牛を飼い始めて3年目。農家の長男として生まれて、このままで終わっていいのか。一度は死ぬんだから、やれることはやった方がいい。だから一度リセットして、自分で思っていることをやりましょうということで、今は理想的な牛小屋で牛を育てている。



“牛飼い”のたすきは息子へ

牛を飼って不自由は感じないと言えば嘘になるけれど、やっぱりやっていいと思ったな。梨でも動物でも野菜でも好きなのは、手入れをすればそれだけ、そのものに対して見返りがあるから好き。大根にしろ、きゅうりにしろ、牛にしろ、梨にしろ、手入れすればするほど見返りがあるから。人間は裏切るけれど、野菜や動物は裏切らないから。



志賀さんが飼育されている牛
(2020年1月)

うちの息子も今はタイにいるけれど。あと10年で定年になるので、「定年になるなら、牛飼いをやってくれ」と言って、「やる」となった。それに3歳違いの姪っ子もやるということで、どこか土地を見つけて牛飼いをして、道具をみんな揃えてやるから、あとは(二人で)やれよと言っていて。たまに来て手伝ったりしている。やっぱり息子がやると言ったこと自体がうれしいからね。



梨のモニタリングをやるなら、新しい苗木を買ってきてやった方がいいということで、新しい苗木を買ってやっていて、(育てているのは)11本。ちょうど2018年から梨がなりはじめて、2019年は結構なった。

大熊の梨を再び

今作っているのは青い「香(かおり)」というやつ。これは絶対になくさないと言っていたから。農林51号*の青いやつが、本当は「かおり*」という名前だけれど、私が持っているのは新高(にいたか)*の中で青い梨になったやつを育てていて、「かおり」に似ているからということで「香」という名前をつけた。その方が味がいい。農林51号は、青いけれど甘みがあまりのらない。

大熊の梨を食べたら、他の梨は食べない。糖度は幸水(こうすい)*で13.8度だけど、大熊の時は糖度18度だった。「嘘だろ」と言われて、「嘘じゃないから来てみろ」と。「香」なんかはそのぐらい。15度以上。

2～3年後にまた来たらいいよ。梨ができるから。

*農林51号(かおり)、新高、幸水:いずれも梨の品種の名前

編集後記

子供の頃から震災という転機を迎えてもなお農業と向き合い続けるという志賀さんの生き様と、農業に向き合ってきた気持ちがひしひしと伝わってきました。これまで震災は被害者数などの数字でしか見られていなかったのですが、一人一人の人生に影響を与えたということを実感できた貴重な経験でした。

(編集:中川佳子)



自慢のほうれん草への思いを語ってくださる永井さんご夫妻 (2020年1月)

2020年1月18日、福島県いわき市にお住まいの永井文成さん・ミネ子さんご夫妻にお話を伺いました。お二人は震災前、ご自分の田畑や農協のリースなどの土地で、水稻やほうれん草、キウイを育てられていました。長年農業を続けられてきたお二人に、農業をする上でのこだわりや震災前の大熊町での暮らしなどについて、お話をさせていただきました。

大熊での暮らしを振り返って

文成さん：キウイは（栽培を始めてから）50年で、10年震災で遊んじやった（間が空いてしまった）から、一番長いのはやっぱり田んぼ。先祖からの譲りものだから、（大熊の畑が）みんな中間貯蔵で持っていたのでたまに行くときびっくりする。

ミネ子さん：うちは東電（福島第一原発）の敷地の隣なんです。ほとんど東電敷地の裾野に我が家の土地があるという感じで。東電があったから自動車の数は多かったけれど、まわりの雰囲気も人間関係も、静かというか、おっとりしていた。何かとろっとした（落ち着いた）感じだった。

今は（少し遠出をしようと）車で出発しても、町中に行くよりは結局山の方に向いちゃうんですね。田んぼの真ん中のあぜ道を車で走ったり。農作業をやっていた10年前は「大変だったな」と思ったけれど、今となってみれば本当に懐かしいというか。でももう年齢が年齢だから、結局もう弱っているんですよ。

今は何もやっていない。孫が学校が終わると、途中、立ち寄ってくれるのが唯一の楽しみです。そのぐらいで何の楽しみもないですね。ただ地域の方から誘われてハーモニカのサークルとか、あと書道のサークルに入れてもらって、楽しくやっているぐらいです。

大熊で育てた 自慢のほうれん草

文成さん：我々が作るほうれん草は食べると柔らかいから美味しい。

ミネ子さん：自分のところのことを言うのはおかしいけれど、本当に美味しいと思っていたね。

文成さん：ほうれん草は、ちょうど隣町でやっていた人がいて、これはいいなと思って始まったんです。なぜかという、我々の浜の近くでは合っているなど。だから、地の利を活かした作物でないと競争には勝てないと思ったから（始めました）。

ほうれん草は冬の作物なので、夏に30度以上になると生育がストップするんです。だから浜のそばでないと絶対に育たないんです。だから浜のそばで売って、しかもサコマという日除けをかけて、温度を下げて高値で販売するように、夏に育てるように出荷していたわけです。同じ大熊でも、本当の浜のそばで。今の原発のあの辺でないと。



文成さん：本当はヤマセ*の吹くところが一番いいんです。ヤマセだと温度がずっと下がるから。だから大熊でもほうれん草ができるのは、東電の南側と、あとは熊川の浜の方ぐらいしかないんです。だから(栽培が)始まった。冬はどこでもできますけれど、夏に作るには。

(こだわりとして)化学肥料はあまり入れなかったから、主に大熊でカントリーエレベーターという粕を乾燥させる施設を農協でやっているの、そのゴミが出るんです。そのゴミをもらってきて、木村さん(P51にお話を掲載している木村紀夫さん)のところで豚をやっていたので、その豚の乾燥した糞を混ぜて堆肥にして、それを入れていた。それだけ。あとは何の肥やしも入れていない。

ミネ子さん：(収穫が遅れて売り物にならなかったほうれん草を)近くの人に配って歩いたけれど、そういう人たちには、10年後の今でも「あのほうれん草食べたいね」と言われます。

文成さん：だから大熊のほうれん草は、いわき市場でも一番か二番の値段(だった)。

*ヤマセ：東北地方太平洋側に6月頃から8月頃にかけて吹く、冷たく湿った季節風のこと。当該地域の農作業に重大な影響を与える。

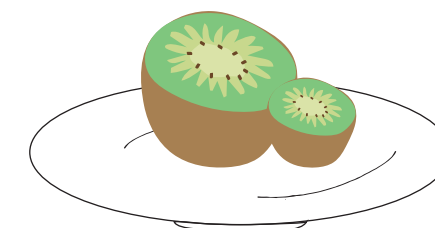


聞き書きの様子(2020年1月)

キウイ農家という顔も 持ち合わせていた 永井さんご夫妻



文成さん：(キウイ栽培は)最初は大熊町で町おこしで推進したんです。今から50年ぐらい前で
すね。それで始まったわけです。それでみんなそれぞれうまくいったので、ちょっとずつ増やして。15ヘクタールぐらいあったかな。震災になる前頃は大熊の特産だったからね。福島県で大熊と言ったらキウイか梨ぐらいだったから。キウイというのは、果物はみんな同じだと思うけれど、その家、その家の肥やしというか、手入れの仕様によって味(の差)が出る。手入れをすればするだけ、味に出てくる。化学肥料ばかり入れると全然コクがないし、サラサラで、全然味がないのと同じで。有機肥料ばかりだったから、一言で言えばまるやかな味でいいんじゃないかな。



編集後記

率直に故郷を思い続けるご夫妻のお気持ちに感銘を受けました。いつの日か、ご夫妻が大熊町でお米やほうれん草、キウイの栽培を再開できるよう願うとともに、私たちの活動が少しでもそのための助けになればと思います。ご夫妻のご自宅は現在中間貯蔵施設となってしまっており、しばらくは大熊町に戻ることはできないし、戻れたとしてもそこにはかつての大熊町の景色は残っていません。改めて「復興」とは何なのか考え直す機会となりました。

(編集：町田兼都)



お話をしてくださる末永さん (写真中央) (2020年1月)

2020年1月19日、福島県いわき市にお住まいの末永精一さんにお話を伺いました。末永さんは震災前、稲作を中心とした農業と、熊川で鮭の稚魚を放流し、遡上してきたものを捕獲する栽培漁業を行われていました。また、大熊町議会議員を6期、議長を1期務め、地域の漁業組合長としても20年間活躍されていました。そんな末永さんに、震災当時の状況や漁業組合の様子、鮭の放流についてお話しいただきました。

熊川での鮭の稚魚の放流

卵を取って、精子をかけて、受精した鮭を、大体10グラムまで育てて放流するんです。メスで上がってきた鮭は、水槽に入れて、オスはバラで(トラックに載せて運ぶ)。メスは川の水を飲まないと産卵しないんですよ。

(放流した稚魚が)生まれた川に戻ってくるということは、間違いない。卵から生まれて最初に飲んだ水が、母水と言って覚えているらしい。いくつ川があっても自分の川がわかる。(放流して戻ってくるのは)一般には4年だけれど、3年、5年、6年でも戻ってくる。

(鮭の稚魚の放流を行っていた河川は)福島県に10河川あるけれど、(震災前は)木戸川*と泉田川*が1,000万毎年放流して、三番目が熊川で600万放流していたんです。1,000匹に1匹か、いい時で3匹が戻ってくる計算なんだけれど。

*木戸川=いわき市と、双葉郡の川内村を通り、檜葉町から太平洋に注ぐ河川

*泉田川=双葉郡浪江町から太平洋に注ぐ河川



鮭の稚魚の放流の様子

震災当時の状況

(震災があった3月11日は)県内各河川の漁業組合長が集まって、会長会をやっていたんです。県からも二人来て。1時間前に終わって解散したから、私は車で走っていて、なんだろうと思って止まったら地震で。副組合長は、停電になって稚魚が死んでしまうから、みんな放流したらしい。放流できる時期だったから。すぐに津波が来て、逃げるのがやっとだった。いやいや、あんなことは…。

(会長会をしていた漁業組合の)事務所は何もない。土台しか残っていない。記念碑も建てたけれど、記念碑まで流されて。(そのあたりは)ほとんど家はないな。

避難生活の中での様々な困難

津波が来た次の日は避難しないとならないから、バスが来るからということで、みんな集結していて、バスで避難したんだけど、二日か三日だと考えて着の身着のままで。バスが来たら、年寄が先に乗れというから、若い人と年寄は別になって、あれはまいったな。家族が一緒になく。こんなに長いとは思わなかったものな。

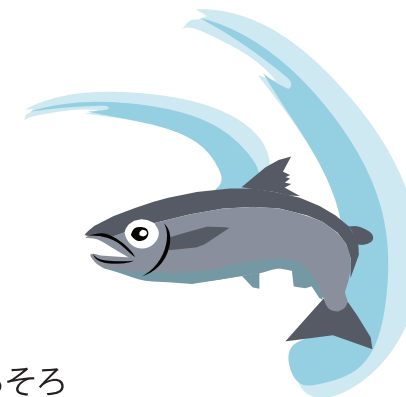
大熊から、最初は、(田村市)船引(ふねひき)の体育館に最初に行って一晩だったか、二晩だったかな。今度はデンソー*の建てたばかりで、まだ出来上がっていないところにシートを敷いて、毛布をもらって、約1ヶ月いたかな。デンソーには何千人かな。大熊だけでないから。風呂は入れないし、便所も詰まって使えなかった。

それから今度は、喜多方の旅館「俵屋」に世話になって、あと(会津)若松に4年いたかな。会津は雪が多くて、それでいわきの方に一軒家を買って私と妻と真ん中の孫の三人で暮らしています。

*デンソー：当時建設中であった「デンソー福島」の工場(田村市船引町に所在)



聞き書きの様子 (2020年1月)



漁業組合長としてのご尽力

組合員は25名で今も同じ。世代交代した人は若いね。うちもそろそろ年だから息子と交代しようと思っている。これから組合員も増やさないといけないので、できれば入ってもらいたいと話してはいるけれど。

前の組合長の時に、県の指導で銀鮭の銀系の卵を品種改良するということで、熊川の鮭を分けてやって、4年間やったんだけど、それで落ちてしまって(うまくいかなくて)。その時は銀系の卵で受精したやつを県でよこしたけれど、4年目には、普通だと遡上するのが11月なのに9月中に上って来て(出荷することが出来なかった)。それでその後は在来種というか、元からいた鮭を(放流していた)。

(現在でも)放流は毎年やっています。今は(本格的には)とっていないけど、いくつかとって、放射能があるかどうか調べたり。鮭はほとんど放射能は大丈夫なんですよ。どこで測っても。

編集後記

町議会議員や漁業組合長、鮭の栽培漁業、農家など様々な分野で活躍なさっていた末永さんだからこそ語れるお話だと実感しました。震災時のお話では、「まさか」の連続で、自分も他人事ではないなと思い、防災の重要性を痛感しました。また、漁業組合のお話では、やはり世代交代や若者不足などが問題に上がっていますが、それとは関係なく楽しそうに仕事をなさっている姿が印象的でした。問題があるからと言って、周囲が悲観的に決めつけすぎている側面があるのかもしれないと考えさせられました。

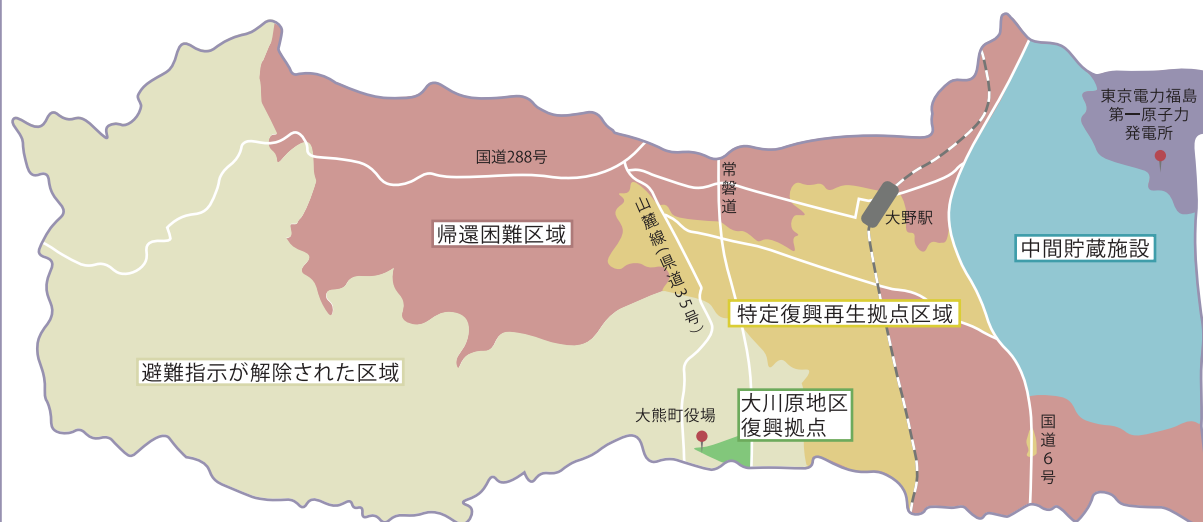
(編集：青野りさ)

大熊町への避難指示と復興への歩み

東京電力福島第一原子力発電所の事故によって、事故発生の当日から、原発周辺の自治体には避難指示が出されました。事故から10年以上が経ち、既に避難指示が解除された自治体もありますが、大熊町の一部は今もなお、避難指示の対象となる「帰還困難区域」に指定されています。

放射性物質による汚染のレベルが高く、避難指示の解除までに長い時間がかかるとされる「帰還困難区域」。この区域では、長期間にわたって居住が制限され、住民の方であっても、通行証が無いと立ち入ることができません。

事故直後から町全域に避難指示が出されていた大熊町の一部が、「帰還困難区域」に指定されたのは、2012年の12月でした。この時「帰還困難区域」に指定された区域は、町全体の面積の62%にも及び、町内の残りの地域も、避難指示の対象となる「居住制限区域」、「避難指示解除準備区域」のいずれかに指定されたため、町全域への避難指示が継続されることになりました。



2012年12月時点の大熊町における各地域の状況

国土地理院の地図を参考に作成

※町内の名所や学校など、お話に登場する場所・施設の場所は、P6の地図にも掲載しています。

参考webサイト

「大熊町復興通信」
避難指示以降、大熊町の復興に向けた状況がまとめられています。



(左)帰還困難区域内の様子 (2015年9月)、(右) 帰還困難区域内の様子 (2021年12月)

その後も大熊町全域に避難指示が出されたままでしたが、2019年4月、ついに町内の「居住制限区域」、「避難指示解除準備区域」に対する避難指示が解除され、大熊町に人の営みが戻ってきました。特に、避難指示が解除された大川原地区には、新しい町役場や公営住宅、商業施設などが整備され、大熊町の復興の拠点になっています。

また、未だ町内の6割以上を占める「帰還困難区域」でも、少しずつ復興の道筋が見えてきています。2017年5月から、将来にわたって居住を制限するとされてきた「帰還困難区域」内に、避難指示を解除し、居住を可能とする「特定復興再生拠点区域」を定めることが可能となりました。大熊町でも、JR大野駅周辺や下野上地区などが「特定復興再生拠点区域」に指定されています。

既に除染や復旧作業が進められたJR大野駅周辺は、2020年3月に避難指示が解除され、JR常磐線も全線で運転を再開しました。さらに、大熊町と国は、下野上地区などに対する避難指示も、2022年の春に解除することを目指しています。これに向けて、2021年11月末からは、「特定復興再生拠点区域」に通行証なしで自由に立ち入ることができるようになり、翌12月からは、帰還後の生活の準備のために夜間の宿泊が認められる「準備宿泊」も始まっています。こうして、大熊町の復興は着々と進み始めているのです。



(左) 全線で運転が再開されたJR常磐線大野駅 (2022年2月)

(右) 大川原地区に建設された大熊町役場の新庁舎 (写真=大熊町提供)



画面越しに写真を見せながらお話をしてくださる武内さんご夫妻 (2020年11月)

2020年11月29日、栃木県鹿沼市にお住まいの武内弘さん・都さんご夫妻にお話を伺いました。大熊町にお住まいの頃は米作りを主に行っていたらっしゃいましたが、現在は柿、梅、キウイ、ブドウなど様々な果物をご自宅でご育てておられます。そんなお二人に、震災前の暮らしから震災当時のお話、そして現在の思いなどをお話しいただきました。

震災前のお二人の暮らしと大熊の魅力

弘さん：(震災前は)米作りと、東京電力の第一原発で働きながら農業をやっていたけれど、建設も終わったので、定期検査と言いますか、そちらには行きたくなかったこともあり、町議会に(震災前から震災後にかけて)4期勤めていました。(震災後は)役場の本庁*が会津若松にあって通いきれなくなり、4期終わったところで、町議会のほうは辞めて、こちらに落ちついて生活するようになりました。

*震災後に会津若松市に設置された大熊町役場会津若松出張所のこと。大熊町の主要な役場機能は、震災の後、現在の新役場が開設されるまでこの会津若松出張所に置かれていた。

都さん:私は大熊町の幼稚園に勤めていました。農業を手伝いながらの兼業農家ですね。どちらも勤めていますので兼業農家。今でも農家に(嫁に)行くと家の人から言われると思いますが、「何もなくていいから。追々できるようになるんだから」と言われながら農家のお嫁さんになりました。

(大熊町は)環境的には最高の、自然豊かでいいところでしたね。山もあり、川もあり、海もあり、本当にいい場所だったなと今思いますね。弘で五代目ですが、先代の人たちは富山のほうから移住、移民してきた人たちで、富山県の入善町(にゅうぜんまち)というところから、入植しているんです。自分たちで鍬(くわ)をふるって開拓して開墾(かいこん)して得た土地だから、やっぱり土地に対しての思い入れはありますね。

震災直後、大熊から栃木県へ

弘さん:(福島第一原発と自宅は)距離的には5キロぐらい。避難していたのは近くに公民館があって、そこに地区のみんなが避難していたけれど、放射能が頭の上に落ちていたのは間違いなかったのかなと思う。

都さん:避難がかかったのが、(2011年3月)12日の朝6時過ぎ頃で、放送で地区の公民館に皆さん集まってくださいと言われて。100メートルぐらい先の公民館に他の人もみんな集まっていたけれど、建物の中はガラスが割れていて、中には入れない状態だったので、みんな公民館のまわりに立って、「なんだろうね?どうなるんだろうね」と言いながらいたけれど、段々と放送がいろいろ言い出して、「バスで避難してください」とか、「大きな車がある人は出して何人か避難させてください」とか。



弘さん:うちは一番最後で自衛隊の幌付きのトラックで、20人ぐらい乗れたかな。寒い夜中に行った思い出が、今忘れられずにいるけれど、どこを走っているのか、どこに行ったのかもわからないで、夜中の12時頃に郡山の磐梯熱海(ばんだいあたみ)というところに行きました。受付の机の後ろに、妻と、毛布が入っていた段ボールをもらって、床に敷いて寝ました。いただいた毛布は二人に1枚でした。

都さん:次の次の避難所で、別々に避難していた両親にやっと会うことができました。夫の妹が仙台に一人いて、(16日に)仙台に電話したんです。そうしたら、「兄ちゃん怒らないでね。私たち呼びたいし、迎えにも行きたいけれど、ガソリンがない、電気が来ていない、水がない、ガスもまだで、そういう状態なので、どうしても年老いたおじいちゃん、おばあちゃんを連れて来るわけにいかないから、ごめんね」と言われて。そうしていると、私たちの娘(長女)が宇都宮に転勤でいたので、まずは1回みんなでこちらに来て、落ち着くまでいたらいと(言ってくれた)。17日に(既に避難した)友達が置いていった車を末娘が借りていて、その車に乗って宇都宮に行きました。娘の運転でダメモトで高速道路に入りましたが、道路は波うっていてゆっくり走りました。

自衛隊のトラックとか、あとは支援物資とか、支援車と書いて、横断幕をつけた車しか走っていなかったんです。それでもそのまま宇都宮まで、途中で10リッターずつガソリンを入れながら行きました。やっと目的のインターに着いた時に、「避難して来たんですか、ご苦労様です、お疲れ様です」と言っ
て、「高速料金は大丈夫です」と言われて、その時に何となく「ふ〜」として、やっぱり緊張していた糸が切れたかなというぐらい、ほ〜とした気持ちがあったのが忘れられないですね。*

*武内さんご夫妻はその後、緑に囲まれた土地を求めて現在の栃木県鹿沼市に移住されました。

大熊への思い

弘さん:なんかあの時のこと、大熊のことを思い出しては、これをやるとか、今頃はこんなことをしなきゃならないから、やっぱりやろうねとか、そういう思いがあって。ここでも大熊と同じ生活を、規模は違いますけれど、したいなという思いがあるみたいですね。ついついやります。

都さん:そうだね。結局私たちの生活の元になっているのは、やっぱり大熊の生活というか、そういうのがあって。たまにお墓参りに行ったりすると、大熊町の様子が変わっているんですよ。いろんな建物ができたり、あとは(震災前に)あった建物がもう壊されてなくなっていたり、本当に様子が変わっているので、寂しい思いと「ああ、こんなふうになっちゃったか」という思いがすごくあって。あともうひとつ、自分たちの家は、このまま帰還困難区域なので、どんなふうになっていくんだろう。いつになったら片付けてもらえるのかなとか。いつまで私たちが大熊に通えるかなという思いもあります。

弘さん:みんな早く帰っているところもあるんだよね。そういった様子を見ると、早く自分のところもという気持ちが、羨ましいな、早く俺たちも帰りたいなという思いが今もあります。

編集後記

震災当時のお話を、日にちを交えながら丁寧にしてくださったことがとても印象的でした。また、別の場所で暮らしていても大熊町にいた時と同じような暮らしをしてしまうというところに、大熊町への深い思い入れを感じさせられました。

(編集:岩田千怜)



梨狩りをする園児の様子を見せてくれた松本さんご夫妻 (2020年11月)

2020年11月29日、栃木県鹿沼市にお住まいの松本光清さん・緑さんご夫妻にお話を伺いました。震災前は、熊町幼稚園の近くの畑で梨を中心とした果物農家をされていました。園児用の梨の木を用意した収穫体験のお話や、原発事故で離れた大熊町への思いを語っていただきました。

園児たちの思い出に残るような 「梨狩り」を

光清さん：(幼稚園の梨狩りを受け入れるようになったのは)昭和55年(1980年)頃からかな。長女の下に二つ違いで長男がいて、年子で次男と、6歳離れて鹿沼で世話になった三男と子供が四人。長男が幼稚園時代だったと思うけれど、たまたま幼稚園の会長をやっていたので、先生方から梨狩りを経験させてもらえないかという提案がありました。

2～3年過ぎた頃から、春先に自分たちで5反ぐらいの梨園の中から園児がクラスごとに梨の木を選んで、剪定の様子から、花の咲いた状況、ミツバチを飛ばす環境、梨の木の収穫までの間を学校の食育教育として組み込んで、最低でも1ヶ月に1～2回ぐらいは散歩がてら見に来るようになりました。そうすると、ものを大事にしてくれる気持ちが生まれるみたいですね。それを目的に、震災の前の年までやっていました。畑に小さい足跡があるのを見ると、自分の孫のような感じがしてかわいかったですね。梨狩りを体験した園児が大きくなってからも下校時や街中で挨拶をされました。

光清さん：梨狩りには、梨を一人2個ずつ渡したんです。1個だけ渡すと、家に帰った後「自分がもらってきた、取ってきた梨だ」と丸々1個食べちゃうらしいんです。もう1個は家族が食べるために、一人2個ずつ渡すようにしていました。梨狩りの当日に休んだ子にも、先生に持って行ってもらって、後日渡してもらうような方法を取っていました。

失った悔しさ ふるさとを

光清さん：(原発事故で)全然生活が変わってしまったんです。ふるさとも失った。熊川地区は、中間貯蔵施設のエリアになっちゃったんです。だから帰るすべもない。

事故の後、一時帰宅をすると、悔しさと無念さ。どのように変わったかという好奇心の感じもあって見に行くけれど、現場を見るとがっかりして、帰りは行く時のようなワクワクはない。だから帰りは辛かったですね。

梨畑は何年かはそのままの状態でしたから、花が咲くと子孫を残すために実は生るんです。それを見ると悔しかったですね。仕事を半端で避難してしまったのでなおさらなんです。

緑さん：戻りたいかと言っても、グチャグチャで、ネズミとかがいて。家はあるけれど、戻りたいかというと大熊には帰りたくない。でも、やっぱり生まれた家だから帰りたい。このこたつ(写真左上)の中に、ハクビシンが10匹ぐらい巣を作っていた。この光景を見て家主が変わったと感じました。

震災から4～5年後頃の松本さんのご自宅の様子。人影がなくなった家の中を、ネズミやイノシシ、ハクビシンが荒らしていく。クズ大豆を集めて重ねておいたが(右上)、1年後にはネズミに食べ尽くされていた(右下)



「今のところ 馴染んでいくしかない」

光清さん：孫の家を（鹿沼に）作ったのも我々だし、最初避難してきた時に鹿沼に安全策を取って来たということもある、やっぱり責任があるので、我々が、じゃあ（大熊町に近い）いわきに戻るといようなことは言えなかったですね。

緑さん：いわきに移っても、今の場所と一緒に知らない人ばかりだし、鹿沼でも知らない人ばかりだから、やっぱり今のところに馴染むしかない、大熊に行ったとしてもやっぱり知らないんですよ。

光清さん：生まれた場所なので捨てがたい場所にはなっているんです。今考えるとやっぱり「ふるさと」になりつつある。未練はないかと言われると、未練はあります。あの場所を戻してもらえたら、行きたいという思いもあります。でも、それが叶わない現実と葛藤しています。



離れていても、 大熊の「伝統」守りたい

光清さん：やっぱり町とつながっていたいという思いは今でも強いんですから、今は休んでいますけれど、地域で郷土芸能（熊川稚児鹿舞/くまがわちごししまい）にも個人で携わっています。震災2年目で負けてられるかっていうことで復活させて。

なかなか手がなく、覚えるまでの苦労が大変なので、親御さんも「はい」って手を挙げるわけにもいかない。ましてや、バラバラになっていますから。今の子供たちは、震災後の二代目。いわきが三人に、茨城県鹿嶋市から一人来てくれて、練習をしてもらっています。紙おむつをつけていた子供までが頑張ってくれています。

2015年にいわき市で行われたイベントで披露された、熊川稚児鹿舞の様子



震災前であれば、小学校の3年生ぐらいから4～5年やって交代していくということだったけれど、今回はないので小学校2年ぐらいですね。最初は鬼ごっこしているような感じでした。だましだまし。やっぱり続けてもらわないとものにならないので、今の子供たちをとにかく一本立ちさせたいです。（鹿舞を舞う時は、）お頭（かしら）*を被るんです。被って踊ると頭が重いので、動きがなかなか子供たちはまだ難しいようです。私は笛・唄・法螺貝（ほらがい）を担当しています。

歴史的には250年ぐらいあるんです。町の無形文化財の指定は受けているんですけど、県に申請しようとした時に、昔からの鹿舞の資料を持っていた家が神社の隣にあったけれど、戦後焼けてしまって資料が全部なくなっちゃった。口伝えというか、そういうもので書き出してみたけれど、やっぱりきちんとした資料がないとダメということで県からは却下されました。

でも昔から受け継がれてきたものなので頑張っています。向こうとの絆ということで、特に私は大事にしています。そういうものは「伝えよう」という気持ちが前に出てこない、風化しちゃうと思うんです。20代から関わってきた郷土芸能の灯を消す事はできない。そういう使命感でやっています。

*お頭：稚児鹿舞の踊り手が頭に被る、鹿の角がついた面のこと。

編集後記

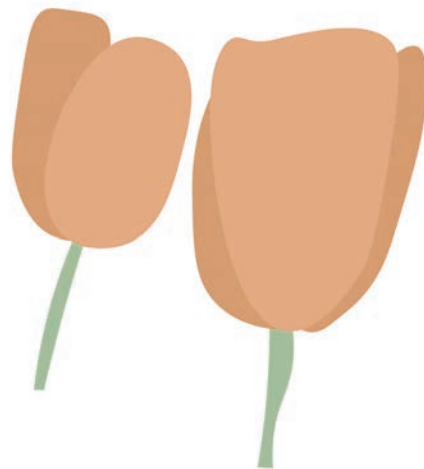
たくさん写真の交えながら、お話をしてくださったのが印象的でした。松本さんご夫妻の農園で、梨狩りをする子供たちの笑顔が目に残りました。震災後の生活についてお話しくださった部分では、あたたかな「日常」と大切な「ふるさと」を失った悔しさがひしひしと伝わってきました。避難者の分散や後継者不足などが重なり、伝統芸能の風化のリスクが高まっています。町の文化をどうやって未来世代に伝えていくかという課題に向き合っていく必要があると感じました。

（編集：塚原千智）



お話をしてくださる宗形さん (2020年11月)

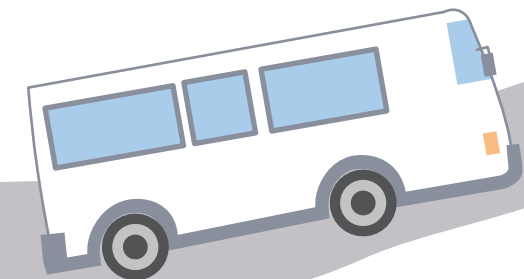
2020年11月29日、栃木県那須町にお住まいの宗形和子さんにお話を伺いました。宗形さんは1990年に大熊町に移住され、花壇でチューリップやスイセンを育てるなど、ガーデニングを趣味とする主婦として生活されていました。また、現在は残念ながら新型コロナウイルスの感染拡大により活動ができていませんが、震災以前からおおくまふさと塾に所属し、様々な活動に取り組まれてきました。



宗形さんの震災後の生活

震災時には発電所から5キロ圏内の自宅におりました。その晩はまだ大丈夫というので寝ましたが、余震でほとんど寝れませんでした。朝起きたら消防団の人たちからすぐに避難してくださいということで、避難が始まりました。最初はバスで阿武隈高地の(田村市)常葉町に行ってくださいってことで行ったのですが、(常葉町の施設が)満員で入れなかったのので、常葉町からあぶくま洞(鍾乳洞)のある(田村市)滝根町の体育館に避難することが出来ました。

それから、主人の実家が矢吹町にあったのでそこに行きました。両親はいなかったのですが、家が空いていたので約2年9ヶ月そこにいました。その後、家も古くなっているので、今住んでいる那須町に移りました。私は避難場所を探し歩くということがなく、最初に移れ、次も移れてという感じで幸運にも安心して生活できたほうなのですが、今思うことは、毎日の暮らしが何事もなく、夜は布団で寝れ、次の日を迎えられることがどんなに幸せなことか身にしみています。



大熊と現在の住まいの間で揺れる思い

私の大熊の自宅は、まだ大部分が除染の計画もない白地(しろじ)地区と言われるところで、そういうところをいつまでに除染を終えるという計画を早く示してほしいというのが私を含め、町民の願いですね。

でも、「何年までに除染が終わりますよ。そしたら住めるようになりますよ」となったとしても、今の状態のままなら考えちゃいます。除染をするといってもうちの周りは木が多いので、あれをどの程度に除染してくれるのか。住めば都という言葉がありますが、今那須町に住んでいると年々愛着は出てきますね。大熊町への愛着もゼロにはならないと思うのですが、相対的にどっちが上なのか日々考えるようになっていきます。

栃木県に避難している人たちの大熊会があり、現在はコロナであまり集まることが出来ませんが、会員同士でそば打ちをしてごちそうになったり、近くの観光地に行ったりしています。各地の避難先で、皆さん交流会を作り、つながりを持っています。

私は直接言われたことはないのですが、「いい車に乗っているね」とか、「お金をいっぱいもらえていいね」とか聞こえてきます。大熊町と関係ない人たちの中に入ると、これは言わないほうがいいのかなとちょっと気を使うことがあります。避難者同士で話すと、本当に困っていることがわかってもらえます。

おおくまふるさと塾の活動

ふるさと塾は平成8年(1996年)にできました。塾生と私たちは言っているのですが、塾生はみんなもの好きというか好奇心が強いというか、そういう人たちばかり。したいことはみんなで行おうじゃないかということです。古代米ってご存知ですか。昔のお米。食べたことはないかしら。ちょっと赤っぽかったり、色がついていたりします。そういうのを作ろうということになり、古代米の苗を塾生たちで田植えをして、収穫しました。

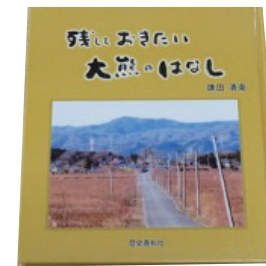
私は大熊町の生まれではないですが、大熊町の歴史とか史跡なんかを知ろうという気持ちも持っています。これ(“残しておきたい大熊のはなし”／写真)は大熊町の図書館で、開館10周年記念で出した本で、町内各地域にまつわる残された話、創作民話などを集めています。これ(“大熊町方言集”／写真)は、塾生の鎌田清衛さん(P47にお話を掲載)、庄子ヤウ子さん、監修の小林初夫先生の熱意と努力で震災後発行したものです。

大熊町の布芝居で伝えるような伝承民話、歴史を次世代の若い人たちに伝えていかないといけないというような使命感を持っている塾生もおります。今の子どもたち、小学生、中学生たちは、大熊町のことをほとんどわからないですね。震災時に幼稚園児で、10年経っているから今は中学生でしょ。避難後の生活・学校・友達が実感できて、大熊町はこうだったよって言われてもピンとこないみたい。それはどうしようもないことだと思います。大熊町のことを子供たちに伝えていかないといけないと思いますけど、なかなか難しいです。

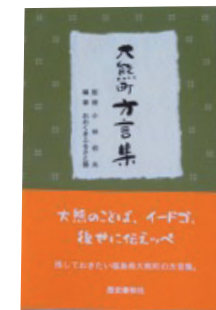
編集後記

大熊町の伝統を残すために行われている布芝居などの取り組みから、宗形さんの大熊町への強い思いを感じました。また、震災時に宗形さんが経験されたことから、安定的な日常を繰り返すことの幸せを知りました。宗形さんにお話ししていただいた震災時の教訓や大熊町の魅力を、多くの人に届けていきたいと思います。

(編集:藤原蓮)



(左) 残しておきたい大熊のはなし
(2020年11月)



(右) 大熊町方言集 (2020年11月)

おおくまふるさと塾とは

平成8年(1996年)1月9日「町づくりは人づくり」をテーマに、日本各地で町の活性化に取り組む萩原茂裕氏を講師に招き開講された「ふるさと塾」受講者を中心に、「聞くだけでは終わりたくない 何か新しいことへの挑戦」を趣旨に発足。初代塾長に石田宗昭氏が就任、現在二代目渡部正勝氏が就任。

月一回の定例会を開催。「歴史・民話部会」「自然・木の実部会」「古代米部会」を構成。

大熊町の「自然、歴史、文化」などを楽しみながら

- 1 みらい(子や孫の世代)へ向けて、自分が育った地域を誇りに思うような“ふるさと”を築くこと。
- 2 「ここほれワンワン!」「わいわいガヤガヤ!」と話し合いのプロセスを大切にしながら、自分たちが大いに楽しむこと。
- 3 「とにかくやってみっぺ!」「えいっ!」と実践・そして反省すること。
- 4 「この指とまれ」と仲間の輪を広げる。

をモットーに塾を運営。

大熊町生涯学習推進協力団体として、公民館事業・青少年健全育成事業などへの協力、大回転布芝居の公演、文化財保護事業への協力、大熊町の方言集の発行、大熊町の民話編集支援などを行う。

文責:おおくまふるさと塾 塾長 渡部 正勝



震災直後の様子をお話してくださる吉岡さん (2020年11月)

2020年11月29日、栃木県佐野市にお住まいの吉岡三重子さんにお話を伺いました。吉岡さんは震災前、専業農家として米や野菜を作りながら、地域の方たちにパッチワークの作り方を教える活動などもされていました。そんな吉岡さんに、震災当日の様子や、大熊町への思いなどについてお話しいただきました。

吉岡さんの震災までの日々

私は生まれた時からずっと大熊にいました。うちは米作りの農家だったんです。お米と自分のうちで食べるくらいの野菜を作って生活していました。60歳を過ぎたころからは、町のスポーツクラブのウォーキングとかトレッキングとかにも参加するようになって。お友達がたくさんできて、旅行をしたり一緒にご飯を食べたり楽しく暮らしていました。

だいそれたことではないんですが、パッチワーク、帽子作りっていうのを(地域の)みんなとやっていたんですよ。何人か集まった時、私は先生に習いに行っていたものですから、そういうのを教えてってことで集会場に、2週間に1回集まって近所の人とやっていました。震災の前の晩も集まってやっていたかな。

震災の後に避難したでしょ。避難先では当然知り合いもない。でもパッチワークやっていたから、自分で布を買って家で縫ったりなんかできたから。会津でも避難しながらみんなで集まってやっていたから、それはよかったかなと思っています。



吉岡さんが作ったパッチワークの作品
(2020年11月)

震災の日の記憶

次の日にウォーキングの仲間と沖縄に行く予定だったんです。10年も経つのですが、やっぱりあの日のことはなかなか忘れられない。思い出したくはないんですが。

あの日は、まず午前中にウォーキングをして、お昼ごはんを食べて、隣のおばちゃんにいただいたパンジーの苗を植えていました。幼稚園から帰ってきていた孫が、家の中でテレビを見ていて、私はパンジーを植え終わって長靴を脱いで家に入ろうかと思った時に揺れて。

しばらくしたら、うちの息子が向こうから走ってきたんですよ。道路の途中が陥没していたから、途中で車を置いて走ってきたってことでした。子供たちを学校に迎えに行く間、貴重品とか用意しておいてって言われて、そういうのを出したり、遺影を取って車に積んだり、貯金通帳とかを出したりしていたら、津波が来るかもしれないから体育館に避難をしてって放送がありました。

発電所のことなんて頭にはないものですから、毛布だけ持って、明日来て片付けるかって感じで体育館に行きました。私と旦那と孫二人は体育館の中、息子夫婦と一番上の孫は車の中、駐車場のね。それで一晩過ごして。体育館も余震がひどくてね、怖くてね。

先が見えない 避難生活

(地震が起きた翌日の3月12日の)朝方、体育館の玄関に防護服を着た人から、発電所の電源がどうのこうのだから「西に向かって避難してください」って言われたんです。西のどこっていうんじゃないくて、ただ西に向かってって。

家族バラバラでどこに行くかわからないのは嫌だから、息子の車に家族七人で乗って、なにしろ道路が走れないからあちこち行って。最初は山形に行ったのかな。息子の同級生と一緒に山形に行くかって言われて、山形に一晩泊まったかな。雪道でね、暗くてね、心細かったです。

山形に結局1ヶ月以内かな。それで大熊の学校を会津若松市で始めるということで会津に行って、ホテルにお世話になりました。それから佐野に息子が勤めていた会社の物流センターがあったので、そこに転勤という形で息子たちが(引っ越すことになって)。その後あちこち土地を探したりして、今のうちを(佐野市に)造って一緒に暮らすようになりました。

ふるさと大熊への思い

もう一度大熊で暮らしたいという気持ちは、ないですね。一人で戻ってもしようがないし。大川原に土地を買ってうちを造るという考えは…。前の家に戻れるわけじゃないですから。今のところのほうがいいですね。

それでも大熊の人たちとは、時々、年に何回か今までは花見をしてたり、どこかの温泉で集まるっていうのがあって。大熊の人だって思うだけで、懐かしく感じます。大熊弁がね。今は孫の運動会に行って大きい声を出すと「母ちゃん、小さい声で」って言われる。「母ちゃん、訛っているんだから」って。直らないですね、大熊訛りはね。

大熊の風景が蘇ってくることも、当然ありますよ。紅葉の時期になれば、坂下ダムのあたりのあのモミジは紅葉したかなとかね。あと春になって庭に植わった木に新芽が出るでしょ。そうすると私、「(震災前に住んでいた)家の後ろの山の木も芽が出たかな」とか思って涙が出てきたんですよ。

今こちら(佐野市)に来て、こちらの人間ではなくて、やっぱり大熊の人間なんです。私たちは。住所も住民票も大熊にあるし。栃木に家を建てて固定資産税は払っているけど、あとの税金は大熊町に払っているの。「どうしてこっちに住所を持ってこないの」って何もわからない人は言うんです。でもやっぱり向こうに置きたいものね。私たちはいつまでたっても避難民なんですよ。

大熊っていいところだったんだなあ、離れてみてね。川があふれることもないし、山が崩れることもないしね。失って初めてありがたみがわかるんですよ。ふるさとなんてね。何もいいことはないと思っていたけど、失ってみて初めてわかるものですね。

編集後記

震災当日の様子や、大熊町に住んでいた頃の思い出について、具体的な地名などを交えながら、細かくお話ししてくださったことが印象的でした。それだけ、震災や大熊町にいたころの記憶が吉岡さんにとって重要なものなのだろうと思います。震災だけでなく、当たり前と思っている日常のありがたみを、改めて捉え直すことができた貴重な経験でした。

(編集:阿部翔太郎)



諏訪神社で行われていた
鹿舞の様子 (写真=大熊町提供)

くまがわちごししまい 熊川稚児鹿舞

大熊町には、古くから町民に親しまれてきた伝統芸能がたくさんあります。その中でも特に有名なのが、町の無形文化財にも指定されている「熊川稚児鹿舞」です。

熊川稚児鹿舞は、200年以上前の江戸時代から、主に大熊町熊川地区の男児が受け継いできた伝統芸能です。かつてこの地域が凶作や疫病に見舞われた際、熊川地区の諏訪神社に「鹿」に扮した舞を奉納したことがその由来とされ、震災前までは諏訪神社の境内で鹿舞が舞われていました。戦時中も中止されることなく開催され、長年にわたり地域の人々を結びつけてきました。

稚児鹿舞は、舞方・シシコと呼ばれる踊り手と、笛や太鼓などを演奏する囃子(はやし)方によって行われます。踊り手には、鹿役が四名と野猿役が一名おり、囃子方の唄と太鼓や笛の音に合わせて舞を披露します。踊り手は4年から6年ほど務めると次の世代と交代し、舞の指導を行います。こうして200年以上もの間、伝統の舞が受け継がれてきたのです。



(左) 舞を披露する踊り手たち、(右) 震災後に行われた鹿舞の様子 (写真=大熊町提供)

しかし、震災後の避難生活によって熊川地区の住民は散り散りになり、稚児鹿舞は一次中断を余儀なくされました。それでも、地元の小学生や保存会の努力もあり、2014年の夏に震災後初めて稚児鹿舞が披露されました。現在でも、熊川地区に縁のある家庭の子供たちが踊り手として舞の指導を受けており、伝統の鹿舞はたしかに受け継がれています。

震災前の大熊町は、美味しいフルーツや水産物など多くの特産品で知られる、農林水産業が盛んな町でした。そんな大熊町の特産品の中でも特に有名だったのが、町のマスコットキャラクター「おおちゃんくうちゃん」も大好きな梨とキウイと鮭です。



おおちゃんくうちゃん
(写真=大熊町提供)

大熊町の農林水産業

なんといっても、大熊町一番の名物と言えば梨。「幸水(こうすい)」「豊水(ほうすい)」などの和梨と、「ルレクチェ」「ラ・フランス」などの洋梨が栽培されていました。有機質の肥料で栽培されるものも多く、自然のままの優しい甘さが町内外から好評を博していました。

志賀さんのお話は
P11に掲載しています。

現在も梨の栽培を続けている志賀正典さんによると、大熊町の梨は糖度18度にもなったのだとか。

ビタミンCや酵素など体にいい成分がたくさん入っているキウイも、大熊町自慢の特産品です。みずみずしい果肉と爽やかな香りが特徴の大熊町のキウイは「ビーナス」と呼ばれ、人気を集めていました。また、梨やキウイを原料に作られたワインも大熊町の特産品として知られていました。



鮭の漁の様子/稚魚の放流/熊町幼稚園園児による稚魚の放流 (写真=末永精一さん提供)

川と海を旅する鮭の漁は、町南部を流れる熊川で行われていました。毎年春に鮭の稚魚を放流し、秋頃に海から遡上してきた成魚を捕まえます。震災前は、鮭の遡上の時期に合わせて毎年「熊川鮭まつり」が開催され、鮭のつかみ取りや即売会が行われていました。震災後は本格的な鮭の漁獲は行われていませんが、稚魚の放流は再開され、今も秋になると大きな鮭が熊川に遡上してきます。



ISHIBASHI HIDEO & HIROKO

石橋英雄さん裕子さん

お話をしてくださる石橋さんご夫妻 (2020年12月)

2020年12月6日、福島県いわき市にお住まいの石橋英雄さん・裕子さんご夫妻にお話を伺いました。震災以前は、消防に勤めた後農業をされていた英雄さんと、大熊町で幼稚園の先生をされていた裕子さん。当たり前だった日常を振り返っていただき、今の思いを伺いました。

消防士としてみた原子力発電所

英雄さん：原子力発電所の建物というのは、約50メートルのすごく高い建物で、無窓階(むそうかい)って言う窓がない建物なんです。ですから、消防設備ってのは日本でトップクラスでした。それを小さい消防本部で検査のため立ち入りとかをする。相当苦労したというか、勉強して。あと原発の非常電源、あれも消防設備も非常電源が必要ですから、震災のあの当時は、もうちょっと高いところに非常電源の設備があれば、津波でも大丈夫だったというか、そういうところまで深く考えませんでした。

英雄さんのカボチャ

英雄さん：消防を辞める2年前ぐらい、息子が農協に勤めていて、うちでもカボチャをやってくれないかということで(始めた)。息子は仕事が忙しくなってしまって、私がしょうがなくやるようになって、一人で本気になってしまって。農業するかと思って、34年勤めた消防を辞めました。妻が公務員だからということで遊びながら。

裕子さん：種まきからやっているんですけど、カボチャもなかなか大変なんです。

英雄さん：こだわりは、うちの方では町で業者に頼んで道路わきの草をきれいに刈ってくれるんです。それを中型ダンプ10台くらいもらって、20アールの畑に敷いて肥やしというか、肥料にするといいカボチャができる。

裕子さん：手作業だったから、大変だったね。これはみんながみんなやっていたわけじゃなくて、いろいろ失敗例を乗り越えて、自分で考えてやったやり方なのね。「こんなでっかいのは誰が買うの？」って私は言うんですけど、そのくらい規格外でした。

英雄さん：これをなかなか専門でやるというのは難しいですね。最初はこおろぎに食べられたり。形は悪いけれど美味しいんです。カボチャを煮てもらって、いわき市の直売所に朝持って行って、試食してもらって、大体スーパーの半値。午前中になくったら、午後も持ってきてと。少しずつ軌道に乗ったというか、ちょうどその時に震災が起きてしまって。

3月に種を蒔くんですが、なかなか芽が出て来ないんで、蒔く前に種を温めるためにお湯に入れたりするんです。笑い話だけれど、震災の時にちょうど腹のところに(かぼちゃの種を)入れて温めていたんです。それをそのまま避難所まで持って行って、そっちで芽が出ていましたけれど、そんなこともありました。



「規格外」のカボチャと石橋さんご夫妻のお孫さん

大熊町の自慢のホタル

英雄さん：大熊町は、いろいろな場所にホタルが出ていて、うちの前にもたまたまそういう場所があって、30数年前に田んぼ脇の用水堀でゲンジボタルを見つけて育てたというか。

裕子さん：ホタルが食べる貝を田んぼ横の堀で育ててみたい。そうしたら、そこにホタルがたくさん来るようになったのね。水の流れもきれいにしていたから。ちょっと有名になっちゃったのね。一応この場所は皆さんに知れて。町内の人々が、暑い時に路上駐車して、みんなで見ていて。私たちはスイカを出して「食べて、食べて」なんて言って楽しみましたね。発電所の方たちとも交流があって。

英雄さん：原子力発電所の敷地の中で、ホタルを育てるのを手伝っていたこともあるんですよ。春になると桜も咲く。私らの「ふるさと塾」では出店みたいなものを出して、お祭りを震災前までやっていたんですよ。それで(2011年)3月27日には、ホタルの幼虫を放流しようとした。その寸前に。

裕子さん：今日はこの近く*の大川原というところで、ホタルの餌になるカワナ*という貝の幼虫を見てきたんですけど、少しずつ増やして、さらにここでホタルを育ててみたいという有志の集まりで動いているのを楽しみにしています。

*お二人には大熊町内の会場から、オンラインでお話を聞かせていただきました。

*カワナ：ホタルの餌となる巻貝。お二人は、カワナを他の地域から持って来るのではなく、大熊町のカワナを育ててホタルを増やす活動を行おうとしていらっしゃいます。

文化財レスキュー

英雄さん：今私は「文化財レスキュー」ということで、大熊町の海のほうは中間貯蔵施設で、家を解体しているところが多いので、昔からの珍しいものとか、ちょっと今は見られないもの(古い農機具や、自身が子供のころに使っていた日用品・家財道具など)を探し出して、体育館とかで預かって保管しようということをしています。なるべくそういうのを後世の子供たちに残したい。こういう生活があったんだって、こういう暮らしがあったんだって、そういうものを一生懸命集めたり、聞き取りとか、なかなか難しいけれど、それを今やっています。

裕子さん：やっぱりいいんじゃないですか。個人一人一人ではできないけれど、そういうチームとか、団体に入っているからこそできることっていうのはやってもらいたいなと思います。

震災後10年目 復興祭にむけて

英雄さん：来年(2021年)の3月11日で10年目ですよ。10年も後ろ向きになってもしょうがないから、前向きになろうと。有志で集まり復興祭みたいな形でやろうかと少しずつ動いている。二二・ロツソの「夜空のトランペット」って素晴らしい曲があるんだけど、中学生にその曲を演奏してもらおう。亡くなった方々や遠く離れて避難している人たちに「元気でやっていますか」と、まずそれを計画中です。

編集後記

石橋さんご夫妻の視点から見る大熊町や発電所が印象的でした。ホタルや畑についてもたっぷりお話しくださり、大熊町で丁寧に作り上げていらした暮らしが頭に浮かびます。町を離れた今でも大熊町を想う気持ちに溢れるお二人が、取り戻したい、残したいと思う大熊町の姿を私もみたい、そう思う聞き書き活動でした。

(編集：鈴木愛奈)

KAMADA KIYOE

鎌田清衛さん

お話をしてくださる鎌田さん (2020年12月)

2020年12月6日、福島県須賀川市にお住まいの鎌田清衛さんにお話を伺いました。震災前は大熊町で梨の栽培をされながら、大熊町の記憶や伝統を残す、おおくまふるさと塾の顧問としても活動していられました。現在もふるさと塾の活動は続けていらっしゃいますが、震災前のようにいかないのが現実です。鎌田さんの大熊町に対する思いについて語っていただきました。

鎌田さんの作る梨

うちのほうは高台で水がないんです。それで田んぼではないもの、畑でできるものをある方の指導で、将来ここだったらこれ(梨)ができますよという指導を受けて始めたんです。(梨の栽培は)昭和28年(1953年)ぐらいからですから。19歳と何ヶ月からやって、ちょうど50年目の時に震災でした。有機質100%(の肥料)でやっていたので、そこに放射能が降ったとなると、放射能入りで自然なものはないですから、原発がボツとなった時に、「あ、終わった」と思いました。ですから、思い切りは早かった。そんなに尾を引いて考えて悶々とするようなことはなかった。それ以上やったら皆さんを裏切る行為なので、思い切りは早かったです。

この大熊町というのは海岸線でしょう。海岸から近くて、私のところは海から1.5キロしかないですから、ここ特有の夏の間はヤマセ*という風が吹くんです。6月7月に。その影響で(梨の)栽培は極めて難しいです。病気が多いです。梨の病気というのは、25度ぐらいの気温で、湿度があると木に蔓延するんです。ですから、他の地区よりも過敏になることが多かったです。その代わりできたものは美味しかった。

*ヤマセ：東北地方太平洋側に6月頃から8月頃にかけて吹く、冷たく湿った季節風のこと。当該地域の農作業に重大な影響を与える。



和梨と、あと洋梨を共同で(作っていました)。私が前に作っていた洋梨。大熊では作れないから、今住んでいる須賀川で同じものを作っている人と知り合いになったので、そこから今日は買ってきたんです。

これ(写真)は洋梨のル レクチュって言います。一応洋梨では極上。多分、関東へんで、このくらいの果物ですと、1個500～700円ぐらいするんじゃないですか。



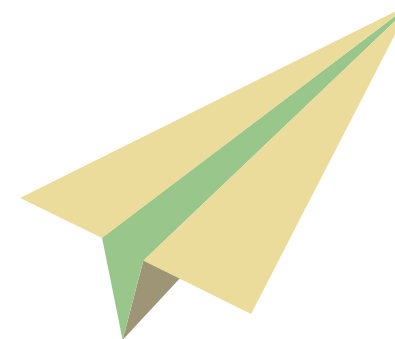
鎌田さんが以前作っていたらっしゃったものと同じ種類の洋梨「ル レクチュ」(2020年12月)

(大熊町のいいところは)やっぱり一番は自然でしょうね。素晴らしい自然があったんですけど、その自然が放射能で汚染されている。そこが一番悲しいところですよ。今はどんどん除染しながら、戻って来れるような状況作りを町は行っているところです。ふるさと塾としては、その主体ではなくて、その(大熊町に戻れるような状況作りの)お手伝いをするという形になっていくと思います。

(大熊町は)別に取り立ててこれがいいというものじゃなくて、自然があふれた中で住みよい町だったということです。他と比較してこれが絶対に良かったということではないと思います。ふるさと塾を最初に立ち上げた時は、「大熊町は原子力発電所しかないよ」と言う人が多かったんですね。外観から見ても。そんなものじゃないよと。大熊町には素晴らしいものがありますよ。子供たちが見て、うちが住んでいるところが素晴らしいよと言えるような、そういう町の中のいいところを探そうというのが、最初の立ち上げの頃の考えですから。その中でいろいろと発見があって、素晴らしかったなと思うようなことはありますね。

だからそれが全部震災と原発事故によってご破算にされた。だからそれをもう一度復活させるというよりも、素晴らしかったよという現実をなんとかして残せればと。復活することは不可能かもしれないんですけど、こういう状況でしたというのは、記録としては残せると思うのです。

大熊町のことを 後世に残していきたい



ただふるさとが失われていくから、できる範囲で自分で自己満足するの、(ふるさと塾の活動を)ただやっている。使命感ではなく、自分で納得するために。

私のところ(住んでいた場所)ですと中間貯蔵施設の用地内なんですよ。ですから、もう少なく見ても30年は戻れない。それから(震災前に)大熊町全体の90%以上(の人が住んでいた地域)が、今も帰還困難区域ですから、すぐに戻ってくるということはできないわけですよ。除染をして、「完全に大丈夫だよ」と言われない限りは戻れない。そうするとその中で、戻れるような状況になるまでに、おそらく住宅も自然解体するような状況になりますし。それから昔の人たちが、先人が、残してくださった遺跡みたいなもの、あるいは貴重なものというのは、おそらく失われていくか、朽ちていくというのが、今の大熊町の実態なんですよ。ですから、それを今の私たちにできる範囲で、それを眺めておきたい。そしてそれを記録として残しておけば、そこに後で住むようになった人が、ここはどういう村だったか、町だったかといった時に、歴史を感じられる。そのために今自分の手でできる範囲で、私はただ自己満足でやっているだけです。

編集後記

鎌田さんのお話から、大熊町に何か残したい、それは自己満足かもしれないけれど、後から大熊町に住む人がその町がどんな町であったかを知るきっかけになりうるという、鎌田さんの思いを強く感じられました。大熊町に記憶を残すための鎌田さんの活動を少しでも知っていただければ幸いです。

(編集:岩田千怜)

KIMURA NORIO

木村紀夫さん

お話をしてくださる木村さん
(2020年2月)

2020年12月6日、現在もいわき市から大熊町に通い続ける木村紀夫さんにお話を伺いました。震災前で両親、奥様、二人のお子さんの六人で暮らしていた木村さんは、津波で海沿いにあった自宅が流されてしまい、お父様と奥様と次女の汐風(ゆうな)さんの三人を亡くされました。お父様と奥様の遺体は震災後2か月以内に発見されましたが、汐風さんの遺骨の一部が見つかったのは震災から5年9か月後でした。

中学校までは大熊で、高校は双葉町の双葉高校。東京の大学に行って、その後戻ってきて。20代の頃はちょっとブラブラしたことがあるけれど、他はずっと大熊です。

(熊町小学校に通っていた頃、大熊町について) 学ぶ機会は多分あったと思うんですけど、ちょっとしたお話だったり、それこそ東京電力のサービスホール*があって、そこに見学に行くこともあったんですけど、ほぼ記憶にないですね。子供なので、そういうところに興味がなかったの。ただ、なんとなく原子力発電というのがどうなんだろうと、感じてはいたように思います。

大熊町の

教育・雇用と原発

*サービスホール：原子力発電のしくみや発電所の安全対策に関する展示のほか、地域住民の憩いの場として利用できる施設

(震災前) 私の家のまわりに12軒あったんですけど、7軒は農業をやりながら原発に行っていました。今から30年ぐらい前、職安(公共職業安定所)に行っても7割がた原発の仕事しかなかった。チェルノブイリ(の事故)があって、どうなんだと強く思うようになったので、(大熊町に) 帰ってきてから原発の仕事をするつもりはまったくなかったですね。28でこっちに帰ってきて(富岡町の) 養豚の仕事に就いた。

人と人のつながりがあった

うちの地区は熊川という地区なんですけれど、伝統芸能的な稚児鹿舞(ちごししまい)、鹿舞は地区の長男がやるんですよ。私も小学校5年から中学1年までやった思い出もあるし、それは地元の諏訪神社でやってたんですね。

夏祭りとかも、諏訪神社の隣にある公民館でやったりとか。正月明けて集まって飲み会とか、稲穂づけて言って、木に紅白の餅みたいなものをつけて飾るみたいなのを作ったりとか。あと地元の年配のおじいさんたちが、縄もじりって言うんですかね。稲か何かを使って、縄を編むことを子供に教えたりとか、そういうことを公民館でやっていたので、やっぱり地区にとっては、そこでの営みの中でなくてはならない場所だったんじゃないかなと思います。

汐風さんの搜索

一番最初は2011年の6月で、それから年3回、時間にして1回に2時間立ち入り許可をもらって、搜索に入っていました。海岸の瓦礫(がれき)を掘り起こして、一人で搜索。と言っても、2時間でやれる範囲って、本当に畳2畳ぐらいなので、それも次に来る時には波に洗われて、どこをやったかわからない。全然結果が得られない中で、2013年ぐらいからボランティアの方たちが、お手伝いに入ってくれるようになって、自分一人では手が出せなかった(2011年の5月6日に2週間、搜索に入った自衛隊が集めた) 瓦礫の搜索をはじめました。

2014年6月、中間貯蔵施設の説明会に参加した時に、環境省の担当の方が、まだ行方不明者がいるということを知らなかった。それで(国には)関わりたくないという気持ちになってしまって、2016年までボランティアの人たちと搜索をしていました。

人だけをかけても最終的に全部終わらないだろうという瓦礫の山で、一緒にやってくれるボランティアの人たちのことも考えて、汐風を見つけないという結果を出したいという思いもあり、最終的に環境省にもお願いして、2016年12月9日に遺骨が見つかりました。そういう状況で今があります。

震災前の営みが感じられる場所を残してほしい

熊町小学校ですが、子供たちが通った学校で、更に今現在、2011年3月11日のままだですね。なので、汐風が生活していた、そこで勉強していた当時のまま残っているんです。それは自分にとってすごい汐風を感じられる場所であると同時に、原子力災害(の痕跡)として残せると思います。

荷物や勉強道具が散乱したままの熊町小学校の教室(2021年11月)



みんなの全部荷物も勉強道具も、そこに置いたまま着の身着のまま避難せざるを得なかったという意味では、それはすごく(震災)遺構*になると思うので、他にないと思うんですね。周辺の町にも(小学校は)あるんですけど、大体は今解体が進んでいて、残せない状況の中で、原子力発電所に一番近い熊町小学校一つぐらいは、ぜひ残してほしいということですね。その他にも、例えば、津波に流された場所とか、犠牲者を出してしまった場所とかもあるので、それは防災について学べる場所として残してほしい。

*震災遺構:大規模災害の被害や教訓などを後世に伝えるために、解体されずに保存される建造物のこと。小学校の遺構としては、2021年10月に浪江町立請戸小学校が震災遺構となった。



(土地の)造成もどんどん進んで、前の姿というものは、全部解体されてなくなっていく中で、震災前の営みをちょっとでも残しておかないと、そこで生活していた我々にとっては、非常に寂しい感じで。家を失うというのは、今の状況の中では仕方ないかもしれないけれど、例えば、神社とか、お寺とか、お地蔵さんとか、そういうものも各所に残っているし、公民館だったら、そこで祭りをしたとか、震災前の営みが残っているんです。それがあって、そこを追いつめられた自分たちも、そこに戻って、当時を思い出す材料になる。それがなくなってしまうたら、もう何も無い。

編集後記

震災前の営みが感じられる場所は、大熊町を訪れた人が震災当時の状況を具体的に想像するヒントにも、そこで暮らしていた方々が日常を思い出すきっかけにもなるという言葉が印象的でした。震災から10年が経ち、記憶の風化が課題となる中で、震災前の大熊町の営みや震災の教訓を次世代に残していくためにできることを考え続けたいと思いました。

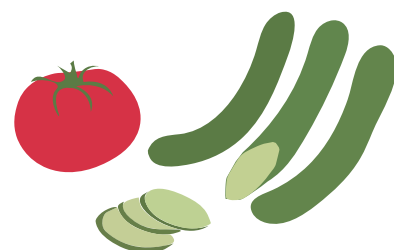
(編集:塚原千智)



お話をしてくださる松永さんご夫妻 (2020年12月)

2020年12月6日にきゅうり農家の松永秀篤さん・妙子さんご夫妻からお話を伺いました。松永さんご夫妻は既に大熊町に戻られ、今は大熊町できゅうりやトマトの栽培をされていらっしゃいます。震災前から農業を続けられている松永さんご夫妻。そんなお二人にまずは農業の魅力について伺いました。

お二人にとっての 農業の魅力



秀篤さん: 俺は時間が自由になるということ。

妙子さん:(結婚する前の)自分の家は兼業農家だったから、そんなに手伝いをするわけでもなく、ちょっとしか田んぼも畑もないから、嫁いで来て田んぼにしても、畑にしても、自分にはできないことがいっぱいあったものです。だけど、段々それが少しずつできてくることによって、それなりの喜びもありましたし、自分が手掛けて、一つのものがものになる。それがやっぱりうれしかったですし、ここ(大熊町)に帰ってきてスモール農業を始めて、やっぱりきゅうりも以前やっていたみたいに自分で種をまいて苗を育てて、そしてきゅうりになった時に、何かすごくうれしかったです。

秀篤さん:(熊川稚児鹿舞は/くまがわちごししまい・は)うちらが小さい頃で250年くらい前からと言っていて、俺が携わるようになって、もう50年になるから300年ぐらいにはなるんだよね。大体一代が5~6年くらい続いて、また次の代に交代するというので、ずっと来ていたんだけど。

うちが入った年にやっぱり「シシコ」というか、踊り子を探すんだけど、どうしても長男、長男と来たけれど、長男がいなくなってしまうと、該当する人がいなくて。それでしょうがないからということで、次男坊でも三男坊でも熊川出身ならいいですということで、それでずっとつないで来たんだけど、それもこの震災で、みんな家族というか、地区の人間がバラバラになってしまって、県内外に散ってしまって。そこから今度子供を見つけるのは大変だったんだけど、たまたま兄弟でやってくれるというのが見つかって、やっぱり小さい頃から熊川で見えていて、憧れだった。



熊川稚児鹿舞のお頭

秀篤さん:やっぱり、(鹿舞を踊ることができる人の制限を)段々やわく、緩和しているから、昔は長男でないとダメだということも変えているし、次男、三男でも良しとして、女は絶対にダメだというのがあったけれど、今回に限り女の子も入っている。そうやっていくと熊川にこだわらなくてもいいんじゃないか、大熊町の人間ならいいんじゃないかということで、元々大熊町の無形文化財だから、町の人間だったらいいんじゃないかなということで、どんどんもっと広げていかないと、本当に「あつら(あいつら)で終わらせた」と言われてしまうから。そこは臨機応変に考えてやらないとならないのかなという思いもあるんですけどね。



妙子さん:引きこもっていてもしょうがないと思うんですけどね。だから、ここ(大熊)にいろいろなことに参加しようという気持ちでやっています。うちの中で言ったら、うちのお父さんは好きなことをいっぱいやっているから、もし時間があったら見に来てほしいです。本当になんて言うのかな、好きなことをやりたいようにやっているのが一番お互いにとっていいのかなって思います。二人だけで生活していますからね。子供がそばにいるわけでもないし、時間は自由になることがいっぱいあるし、だから、そこでお互いにいろいろなことをやって、だって引きこもっていてもしょうがないですものね。そんなふうにして二人で生活していますけれどね。自給自足の野菜だけでやっています。結構楽しんでます。

編集後記

松永さんご夫妻にお話を伺って、大熊町の伝統芸能である熊川稚児鹿舞の魅力や伝統を知ることができました。また、大熊町に戻られている方しかわからない葛藤なども感じられました。私たちはこのような大熊町の伝統芸能や今の大熊町の現状をたくさんの方に伝えていきたいと考えています。

(編集:岩田千怜)

大熊町に戻ってからの暮らし

秀篤さん:自分なんかは、やっぱり大熊生まれで大熊育ちで、もう大熊に帰れるなら、大熊に帰るぞとずっと言っていたから、たまたま大川原におばさんがいて、その人が土地を譲ってやるよということがあったので、(大川原の避難指示が解除されて)いの一番にこっちに来ているんだけど。かと言って、大川原が好きかと言ったら、やっぱり根本的には熊川が強いので、できれば向こうで生活したいけれど、それは無理だな。とりあえず実家の近くで、大熊町だったらいいという感じでいるんだけど。

一人でも多く大熊で生活する人が増えてくれればなと。それは元々大熊町民でなくてもいいから、大熊で生活する人が増えてくれればなと思って、それでいろいろなイベントの仕掛けをしたいなと思っている。これから春夏秋冬、いろいろな花を植えたり、飾りにしたり、昔のままと言ったらおかしいかもしれないけれど、昔やった盆踊りやバーベキュー大会とか、段々復活していこうかなと思ってやっているんだけど。いかにして、注目をしてもらえるかなというのが課題だな。

中間貯蔵施設

中間貯蔵施設って何？



土壌貯蔵施設の様子(2021年10月)

中間貯蔵施設とは、東京電力福島第一原子力発電所事故の後に行われた除染作業によって発生した除去土壌などを、一時的に保管する施設のことです。福島第一原発がある大熊町、双葉町の海側の地域にこの施設が設けられています。話し手の皆さんのお話の中でも、中間貯蔵のための用地の提供や施設の整備にあたって、この地域の住民の方々の深い葛藤や悩みがあったことを伺いました。

この施設に貯蔵されている除去土壌などは、貯蔵開始後30年以内、つまり2045年までに福島県外で最終処分されることが、法律によって決められています。したがって、その時までの“中間”貯蔵とされているのです。ただ、中間貯蔵の開始から5年以上が経過した現在においても、最終処分の具体的な内容や、処分場の場所などは決まっていません。

参考webサイト

中間貯蔵施設情報サイト (QRコード)

中間貯蔵施設や最終処分に向けた取組についてのより詳しい情報は、こちらのサイトからも確認できます。



中間貯蔵施設で何をしているの？

東京都渋谷区とほぼ同じ、16平方キロメートルの広大な土地をもつこの施設の中には、「受入・分別施設」、「土壌貯蔵施設」、「仮設焼却施設」、「廃棄物貯蔵施設」などがあります。

(右)土壌の輸送に使われる土のう袋の例



フレコンバッグなどとも呼ばれる土のう袋に入れられて施設に運ばれた除去土壌は、まず「受入・分別施設」に送られ、土壌とそれ以外の可燃物などに分けられます。その上で、分別された土壌は「土壌貯蔵施設」に送られ、ブルドーザーなどの重機によって敷き詰められる形で貯蔵されます。土壌以外の可燃物は、「仮設焼却施設」で焼却するなどして体積を小さくし、出てきた灰は「廃棄物貯蔵施設」に貯蔵されています。



受入・分別施設の様子

中間貯蔵施設ではこのような形で、除染作業によって発生した除去土壌などを貯蔵しています。また、福島県外で最終処分をするためには、除去土壌の量を減らすことが重要であり、そのために除去土壌の減容化や再生利用といった取組を進めています。



SUZUKI TAKAKO & MARI

鈴木孝子さん 真理さん

お話をしてくださる鈴木さん親子 (2020年12月)

2020年12月20日、福島県いわき市にお住まいの鈴木孝子さん・真理さん親子にお話を伺いました。お二人は震災前、町内で雑貨店「鈴木商店」を営んでいらっしゃいました。震災後、お店は一時休業されていましたが、2019年からは町内大川原地区の仮設店舗で、2021年4月からは大熊町役場の隣の商業施設「おおくまーと」で、鈴木商店の営業を再開されています。お二人に、大熊町に対する思いについてお話をいただきました。

鈴木商店について

孝子さん：鈴木商店を創業したのは、大正2年(1913年)ですね。だからもう100年です。大正の時は、お味噌とか、そういう感じのものをやっていたみたいです。うち(孝子さん)の父ですけど、二代目からいろいろ薬の資格を取っていました。あと、雑貨など本当にあらゆるものを並べていました。二代目からそんなお店に変わり、三代目はそれを引き継いで、今はうちの子がどういうふうにまた…。

震災の後はお店もなかなか手広くできないような状態になっていますからね。(震災前の)お店はいずれ取り壊しになると思うので、そこには戻れないし、だから厳しい状況になっているかなと。それを親としては心配しています。

真理さん：私は「継がなきゃ」みたいなことは、特になかったんですけど、三代目続いているということもありましたし、いろいろ考えていく中で、そこで終わらせるのは…というのがありました。お店は私が好きで小さい頃から手伝っていたので、私も頑張っけて続けて、なくさないようにしていきたいなと思って。それで四代目になりました。今また震災後お店を始めて、企業さんに対しての納品を一生懸命やらせてもらっています。鈴木商店で今まで取り扱っていなかったものを増やしていくことを、今は頑張っています。

震災後、大川原に出ると決めた時は、やっぱり不便でした。今不安もありながらやっているんですけど、商工会や役場の方々から企業さんへ声をかけていただいています。そういう、町の企業を使うということをしてくださる中で、結構資材系の要望もいただくことが増えてきたので、今はそれをチャレンジして問屋さんだけではなく直接大きいメーカーさんに当たったりして、強くやり甲斐を感じています。

逆に大変なことは、インターネットでものが買える時代なので、ある程度安い金額がバーンと出て来ちゃうんですね。小売は商社、問屋さんを通すので、どうしても金額が高くなってしまいうんですけど、どうしたらいいのかなみたいな。どうやったら安くうちに入ってくるのかと考えた時に、すごい悩みを感じますね。

大熊の住宅に戻っている(住んでいる)方は、(震災前は)全然知らなかった方たちがほとんどです。そういった方たちが(お店に)来てくれて、いろいろお話をするようになりました。その方たちも鈴木商店を身近に感じてくれて、お茶を飲みに来てくれて、すごくありがたいと思っています。



鈴木商店で取り扱うオリジナルコーヒー

孝子さん:大熊町は子供が伸び伸びと成長することができる環境でした。近所の子供さんたちも、みんな同級生が結構多くて、それでみんなで見守っていただいて、「どこにいるのかな?」「あそこの役場のとこで遊んでたよ、真理ちゃんは」とか、お店をやっているとどうしても、子供たちがどこに行っているかわからないというので、結構教えてもらいました。「今どこどこで遊んでいたよ、真理ちゃんが」とか、「しーちゃんは」とか言われて、子育てがしやすかったですね。

お二人にとっての 大熊町



大熊町への想いを語ってくださる真理さん
(2020年12月)

真理さん:近所の人たちとの距離感が近いんですね。それで、一緒に育ててもらったというのがもちろんあるんですが、ある一定の学年ぐらいになると、それが煩わしくなる時があって、それが嫌で(同級生)みんな1回家を出たくなるんです。それで、高校卒業を機に一度東京に出ました。出てみると、その(大熊町の)環境がありがたかったということに気づくんです。大熊の良さに気づいた時から、就職しても月に1回は必ず帰省していました。

「復興」への思い

孝子さん:「オリンピックの聖火ランナーがここを走るよ」と言われても、全然ピンと来なかったんです。実際に大熊町に帰ってきている人は少ない。それで、福島からスタートだよと言われても、なんかピンと来なかったです。きれいになった道路とか、新しく建てられた建物とか、そういうところを走って、そこを映されて、



「ああ、こんなに復興したんだ」というのと、まだ手つかずの場所があって、そっちが忘れられるんじゃないかというのが、ちょっと不安です。まだ手つかずの場所があるというのをきちんと説明した上で、こういうふうに少しずつきれいに町が戻っていますという報道ならいいですけどね。聖火ランナーが走る場所だけを見たら、「ああ、こんなに復興したのか」と思われてしまうのではないかなというのがあります。

帰還困難区域があって、家に戻るのに手続きをして許可を得ないと帰れないことを知らない人が多いのではないかと思います。だから、私は自分の家に普通に帰れて、普通に生活できるようになるのが復興だと思う。私が思うのは、多くの方に現状を目で確かめてほしいということです。最初(震災直後)の頃は、雨が降ったり、風が吹いたりしたら、どうなるのかなって心配していましたけれど、もう10年になると、「あ、もうどうしようもないんだ」と。いくら心配しても、私たちが壊すわけにはいかないし、そういう現状を皆さんに見ていただきたいと思いますね。

編集後記

お二人がお話ししてくださった、ふるさと大熊町への思いやかつての記憶から、大熊町の皆さんの暖かさを感じることができました。お二人のお話は、きっと多くの人が心に抱く「ふるさと」への思いと重なり、多くの人の心に響くのではないかと思います。

(編集:藤原蓮)



お話をしてくださる滝本さんご夫妻 (2020年12月)

2020年12月20日、福島県いわき市にお住まいの滝本真照さん・英子さんご夫妻にお話を伺いました。震災以前は、大熊町にてご夫妻で家電製品を扱う「滝本電器」を経営されておりました。震災後、お店は一時休業されていましたが、2019年からは町内大川原地区の仮設店舗で、2021年4月からは大熊町役場の隣の商業施設「おおくまーと」で、お店の営業を再開されています。幼少期のお話から、これまでの生活、再出発された心境など、お二人の思いを伺いました。

震災前のお二人の生活

真照さん：小学校の頃は全然そういうことはなかったけれど、中学になってから、家電製品、電器が好きなんだなという感じがありましたね。最初は大熊の駅前で(お店を)やっていた。販売はもちろんだけれど、あとは販売した商品がある程度年月が経てば故障が出てきて、それを修理して。それが主な仕事です。

英子さん：商店の商工会があって自分たち会員がいて、あと女性部もあってというような仕組みになっていましたから、何かイベントがあれば、何かというと皆さんで話し合っているいろんなことをやってきましたからね。そういうつながりが強かった。

震災時の様子

3.11



震災前に店舗をリニューアルした際の滝本電器

英子さん：地震になった時は、私は家の中にいて、お父さんと息子はお店で仕事をしていて、もう一人の従業員は、お客さんのところを外回りしていて。地震が来て、いろんなものが落ちてくるのですぐで。これで収まるかと思ったら、また来るから、冷蔵庫は振られて中のものは飛び出して、ものは落ちてくるしすごい状態だったので、震えていましたけれどね。お父さんはあの時は店に息子といて、テレビを押さえていましたね。落ちないように。

真照さん：テレビだけでも押さえきれなくて、やっぱり落ちたのが何台かあるんです。その後電気がない真っ暗なところで、懐中電灯の灯りで(過ごした)。あの前に津波が来ていたというのがあって、私らはそれ(津波の被害)はなかったけれど、そういう方もいたということで、本当に心を痛めました。

英子さん：瓦礫(がれき)があるところを払って、分厚いシートを敷いて、そこに上から布団や毛布をかけて、そこで一晩みんなで過ごして。明け方早くかな、息子が「避難しろ」って消防の関係で来たんです。「え？避難ってどこに行くの？」という感じで。あとからバスが来たらしいですけど、私たちは自分たちの車で避難して。南に向かって、いわきに向かって、従業員も一緒に連れて避難しました。

英子さん：次の日に(原発が)爆発したということで、今度はどこに行こうかということになって。茨城の娘のところに行って、埼玉の姉に2ヶ月ぐらい世話になって。その頃メーカーさんの援助があって、仮設の家電の取り付けの仕事を頂いたんですね。それが落ち着いて、今度は息子が(以前から取引があった)パナソニックのつながりで勤めさせていただいて、郡山に行って。私たちはその2年後にいわきに来て、今に至っています。その息子も結婚をして家族も増え、今は私たちの近く(いわき)に来て住んでいます。

もう一度大熊へ、お二人の選択

英子さん：仕事と縁切れなかったし、切りたくなかったと思うんですよ。それしかないから。ただ、大熊町での私たちは地域に密着したお店で、1軒1軒のお客さんでつながっていたお店なので、それが今度いわきに来て同じく(お店を)できるかということできない。

そんな矢先に商工会から「今度商業施設建てるんだけど」って話があって。最初は帰ることは考えてもいなかったんですけど、商工会の懸命な説明で、じゃあやってみようかということで応募しました。



大熊の梨と、忘れられない景色

眞照さん：大熊町といえば、まず梨。大熊町の梨。これは有名。今はそれはないので懐かしいな。残念だな。

英子さん：梨の花の時期になると真っ白な花が咲いて、あれを山上から見た時はすごく綺麗って思いましたね。あとコシアブラっていう山菜を大熊に来て初めて味わって、虜になって。その時期になると必ずコシアブラだけは取りに行きました。

三ツ森山の上に行くと、ステーキなんかによく使うクレソン。クレソンが、小川の綺麗なお水の両脇にいっぱい出ている、よく摘んだりしましたね。ミヤコワスレも一面にばーっと咲いていました。そういう大熊の景色がいまだに脳裏に残っていますね。



お二人のこれから

英子さん：あれから10年経って、お父さんの年齢も結構きてるので、何歳まで身体が健康で家電のお店をやっているのか。もう隠居してもいい年ぐらいなのに、頑張ってエアコンをつけたり、アンテナを直したり、重たいものを運んだりしているので、「俺はもうできないな」と言うまで、何歳までできるのかなと。それがお父さんの挑戦かな。無理してはできないけれど、できるだけ長く続けられたらいいなとは思っています。

私たちは、どっちが抜けても欠けても多分ダメ。とりあえず今は、息子の力も借りながらやり遂げる。やるしかないんだよねって、年取ってから特に思っています。

編集後記

町に密着したお店で築き上げた「繋がり」を大切にされながら、新しい場所でも挑戦を続けられる滝本さんご夫妻。お二人のお仕事やご家族に対する思いを感じた聞き書き活動でした。世代交代も起こる中ですが大熊町での様々な記憶を、この活動を通じて少しでも残すことができればと思います。

(編集：鈴木愛奈)

TOCHIMOTO SACHIE

栃本さちえさん

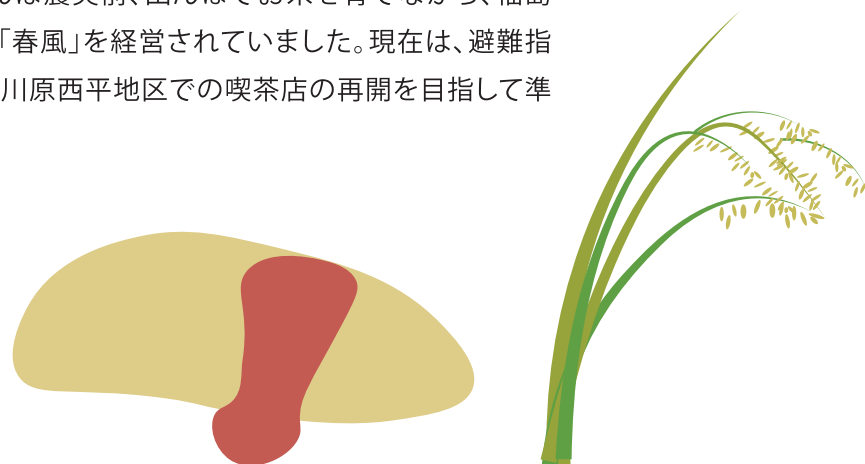
お話をしてくださる栃本さん (2020年12月)

2020年12月20日、福島県会津若松市にお住まいの栃本さちえさんにお話を伺いました。栃本さんは震災前、田んぼでお米を育てながら、福島第一原発の近くで喫茶店「春風」を経営されていました。現在は、避難指示が解除された大熊町大川原西平地区での喫茶店の再開を目指して準備されています。

震災までの生活

(震災前は、午前)11時に喫茶店を開けて、(午後)7時がオーダーストップで8時ぐらいまでという感じですね。家から喫茶店まで4キロほどあったので、毎朝車で運転していきました。原子力関係、東京電力も含めて関連子会社とか、そこに来るお客さんが中心でしたね。

オムライスとチキンかつトマトチーズ焼きが名物でした。オムライスはものすごいボリュームで、オムライスを注文すると、食べきれなくて、それを持ち帰ってお土産にするお客さんもいました。



田んぼの仕事は喫茶店を開ける前の時間や休日にやっていました。うちのほうの行政区だと、補助してくれるライスセンターとか、刈り取り組合がありまして、田植えや稲刈りをサポートしてもらっていたので、あぜ道の草刈りをするくらいでそれほど手はかかりませんでした。1町2反9畝の田んぼで、大体耕作していたのは9反で、残りの3反ぐらいは大豆を作っていました。

地震発生当時の記憶

あの日は大熊中学校の卒業式で、卒業式が終わった後にお母さんたちの親睦会があったんです。その方たちが帰ってから、その時手伝ってくれていた高校生の姪と、あとお客さんが一人いて、三人でいる時に地震がありました。地震が起きてドアを開けて、それが落ち着いたと思ったら、また大きい地震が来たんです。まずはお客さんに帰ってもらって、姪も親が心配しているだろうと思って送って行きました。

姪を送った後、海のほうを通って家に行こうと思ったんですけど、その時に大熊町と富岡町の堺にある境川の近くの道路がすでに濡れていたんですね。それで「ん？」と思ったけれど、全然津波のことは頭になかったんです。それでも、どうもそのまま直進する気になれなくて、しばらく車を止めてなんとなくおかしいなと思って引き返しました。多分津波の第一波だったんだと思います。

事故直後の避難生活

家に戻る途中、小入野地区の公民館の前を通ったら、私の家の門口のところが陥没していて車で家には行けないと言われました。それで小入野地区の公民館にみんな泊まるから、一緒に泊まろうということで、自宅には一度も戻らないで公民館にとどまりました。

公民館は停電していたんですが、発電機を持ってきてくれている人がいて、電気は使うことができましたし、テレビも映っていました。そうしたら、原子力発電所で放射能が漏れているみたいなことが流れて、役場のほうに確認したら、公民館ではなく、今度は大熊中学校の体育館のほうに避難してくださいということになって。だから大熊中学校の体育館で、その日の夜は過ごしました。

次の日、バスで(田村市)都路(みやこじ)の小学校体育館に避難していたんですけど、その日の夜にもう一度避難区域が拡大されて、(田村市)船引(ふねひき)の小学校に夜にまた移動しました。

その後はデンソー*に避難したんですね。その後(大熊町としては)会津若松のほうに移動すると聞いたので、車もない状態では不安があったので、親戚と一緒に(会津の)東山温泉のホテルに避難しました。

そんな時に、従姉妹の旦那さんがアメリカにいて、そこに一緒に行かないかと誘われて、アメリカに約3ヶ月いました。その後は仮設住宅か、借り上げ住宅に落ち着きたいと思って、また(会津)若松に戻ってきました。

*デンソー:当時建設中であった「デンソー福島」の工場(田村市船引町に所在)

栃本さんが語る大熊町の魅力

(震災以前の)自宅は標高30メートルぐらいの高台にあって、自分の家の庭から太平洋が見えたんですね。初日の出とかも、自分の家から見えたりしていたので、それが一番かな。農業と、あと海のある風景と、海から見える日の出とか、そういうものが。

(震災以前の大熊町と現在の大熊町では)同じようなところを探すのが難しい。JRは開通したんですけど、役場の場所が違いますし。それに震災前は梨農家さんがいっぱいありましたけれど、梨の木はみんな切り取られて更地になっていますし、あと駅周辺も解体が進んでいて、建物が徐々になくなっている感じだと思います。

栃本さんが経営していた喫茶店「春風」のボランティアによる草刈り前後の様子



原子力との付き合い方

原発の建設が始まったのは、私が中高生の時だったと思うんですね。建設が終わって30年で廃炉にするという話だったんですけど、できてしまったので、共栄共存でやっていくしかないと思っていました。ただ部品を交換したことによって、(廃炉までの期限が)あと30年延びるということに対しては、いろんな説明会もありましたけれど、それは大丈夫なのかなというふうには思っていましたね。

東日本大震災があって特に思うんですけど、日本はどこで地震が起きてもおかしくないんですよね。そうしたときに、東日本大震災で福島第一原発は放射能が漏れてしまって爆発はあったけれど、もっと大きな原子力発電所の事故が起きてしまえば、相当大変だと思うんですね。

原子力発電所もまだきちんとした廃炉の仕方もわからないし、高濃度の放射能漏れのところは機械を使ってやっていくということですが、もう事故は起きて欲しくないですし、例えば良くないかもしれないけれど、イチエフ(福島第一原発のこと)だけでこういう事故は終わってほしいなと思います。

編集後記

「イチエフだけでこういう事故は終わってほしい」。栃本さんのこの言葉が印象に残っています。自然災害の多いこの国で、3.11のような大規模な災害は今後もまた起こります。だから私たちは、被災者の皆さんが語られる言葉を、「自分ごと」として受け止める必要があると強く思いました。

(編集:阿部翔太郎)



お話をしてくださる渡辺さん (2020年12月)

2020年12月20日、福島県いわき市にお住まいの渡辺信行さんにお話を伺いました。渡辺さんは、震災以前は建設会社の経営、農業に加え、町会議員を務めておられ、避難生活や中間貯蔵の問題などにも最前線に関わってこられました。これまでの経験と若い世代への思いをお話してくださいました。

幼少期

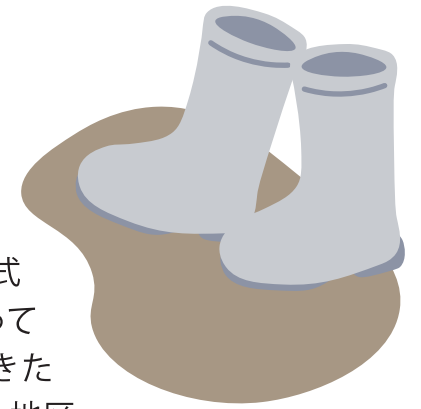
今の第一原発は私らの遊び場だったんです。塩田があって、お盆になると必ずお墓にあげる花取りに行ったり。中学生の頃は、(発電所の)建設でアメリカ人の家族の地区ができて、草をむしったり、お掃除をしたり、そういうアルバイトをしていました。一日あの当時は500円で。

大工に農業、

そして議員に

手に職をつけるということで大工の道に進みました。中学校を出て、12～13年東京に弟子に行っていました。福島に戻ってきて、28歳か29歳の時に独立して、(建築の会社を)自分でやっています。農業は親父を手伝う程度だったけれど、私が30いくつぐらいだったか、(土地を)遊ばせないようにということで農業に手を出して。現場に朝晩行って職人たちに指示して、帰ってきてから種を蒔いたり苗を作ったり。おそらく大熊で畑作としてはトップクラスでした。若者が農業を離れて行って、遊んでいる(手がつけられてない)用地を使ってくれと頼まれて、増えていったというのが現実です。それで、50歳の時に大熊町の町議会議員に立候補して。自分のふるさとだから、第一に考えるのは自分の地区。それと農業振興のために(立候補した)。おかげさまで当選しました。

3.11 震災の日の記憶



(2011年)3月11日の午前中、大熊中学校の卒業式に出席して、それが終わって議会の委員会をやっていて、(午後)2時何分に地震が。天井が落ちてきたり、いろんなことがあって、とりあえず休会にして。地区がどうなっているかを確認しながら、うちの会社の職人たちに「帰れ」と指示をして、家族の安否を確認して。それで夜の9時頃、私らは原発から3キロ圏内なので役場から避難してくださいと。今考えると、津波のあと(原発による避難がなく)一晩、一日時間があつたら、亡くなった方も生きていたかもしれない。

震災というのは、本当に気をつけないと、バカにしてはダメですよ。やっぱりそういう考えを若い人たちに持ってほしい。甘く見ないで。自然の力というのはすごいですから。

各地を転々とした 避難生活

(避難生活の中で)私は地区の体の不自由な人らに優先的に携わって、8回移動しました。(その途中で)建設中の工場に私ら2,000人が入りました。コンクリート、地べたで何もありません。それで毛布2枚ももらっただけです。人間はとてもじゃないけれど眠れない。賞味期限が切れたパンとか、冷たいおにぎりとかを食べるものですから、喉も通らない状態で。あそこに1ヶ月近くいたのかな、ノロウイルスが流行っちゃったり大変だった。

私は議員をやっていたので、大熊の人間を差別するのかって(避難先で)喧嘩したこともありました。今後皆さんにも覚えていてほしいのは、やっぱり震災や水害で一番困るのは女性です。歯ブラシを買う金がない、生理があるのにナプキンがないという若いお嬢さん、そういう人がいっぱいいました。泣いて来られたんですね、私のところに。本当に切なかったね。申し訳ない、涙が出ましたね。

中間貯蔵事業について

会津の仮設住宅に2年間いた後、大熊に通って復興を目指して頑張ろうと、私らの会社は解体とか原発の廃炉作業にも入った。議員最後、副議長の頃に中間貯蔵施設建設のあれ(問題)があつて、最初は先祖から守ってきた土地を捨てられないという考えがありました。ただ、いくら反対しても議会というのは賛成多数ですから。いろいろな人から、「渡辺さん、協力してくれないと前に進まない」と。それでハンコ押して、国に協力して、泣く泣くふるさとを手放して。周りにも説明して。そういう流れで今までやってきました。

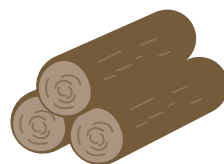
我々が大熊に住んでいたというのは、原子力発電所は絶対に安全だと、常日頃言われていたんです。だけど、たかが水でやられちゃうわけです。だからこれを教訓にして。自然災害を甘く見てはいけない、原発事故は間違っても起こしてはいけない。

私は大工の職業ですから、山から木を切って、それを20年間溜めて自分で自宅を作ったんです。ちょうど東京電力の敷地から田んぼ3枚分先です。この家の材料が痛ましくて心残りです。

今は解体の仕事もやっているのですが、他の業者にやらせようとは思ってなくて、俺の家を壊す時は俺がやろうと。これはドローンで商売人に(家の様子を)撮ってもらって、残そうと思ってね。



楢葉町の業者に依頼して撮影された、大熊のご自宅の様子を収めた Blu-rayDisc (2020年12月)



大熊の 自宅への 思い

先祖から私が引き継いだどれも全部手放さざるを得なかった。だから今後は子供や孫にふるさとを作っておかないとならないという使命があるので、いわきに移住しようという考えを持った。住まいはもちろんだけれど農地も。そこでキウイフルーツとアスパラ、あとはオリーブを栽培しています。

農業の 難しさ

やはり農業は(手間が)結構かかるんです。機械が高いし、手でやったら面積ができない。まして天候に左右され、リスクも大きい。安定性のない職業ですよ。農業に若い人が入り込むというのは、なかなか難しい。私が議員になった頃、資材代とか大体80%が補助事業だった。そういう制度があったから、大熊町は梨やキウイだのが盛んだった。やっぱり行政が先頭に立たないと、農業をやりたいという人に補助しないと、農業は復興ならないと私は思っています。



これからも続く挑戦

一つ計画を立ててるのは、酒類の販売業。前からちょっとしたカフェみたいなものをやりながら、直売所ができないかなという夢があったので。震災前、造成は終わっていたんだけど全部パーになってね。今は(いわき市)郷ヶ丘(さとおか)に喫茶店作って、そこで始めたんだけど。大熊はイチゴも作っているの、本格的にキウイとイチゴでリキュールの果実酒を作れたらと考えています。

編集後記

全てのエピソードをご紹介できないことが悔やまれるほど貴重なお話をたくさん伺いました。中でも、自然災害や、農業をどうにかしたいという思いは、聞き手の学生に対して「これからのために」と何度も繰り返して下さり、心に残りました。読んでくださった方に少しでもお伝えできればと思います。

(編集: 鈴木愛奈)

私たち、慶應義塾大学公認学生団体S.A.L. あじさいプロジェクトについて

慶應義塾大学公認学生団体S.A.L.は、海外へのスタディーツアーやフィールドワークを通して、難民や少数民族などの国際問題について理解を深め、そうした問題についての啓発、発信をしている団体です。現在10個の内部プロジェクトから成り立っています。

その中で、私たちあじさいプロジェクトは「国内の問題も国際問題だよね?」という問題意識から、特に国内の社会問題に目を向けて活動をしているプロジェクトです。2018年に発足して以降、東北、特に福島「今」に目を向ける活動を続けてきました。新型コロナウイルスの影響で、現地に足を運ぶスタディーツアーの実施が難しい中でも、多くの方に福島の魅力や福島の抱えている問題を知ってもらい、それを「自分ごと」として考えてもらうきっかけを作っていきたいと思っています。

私たちのHPには、活動の様子や、冊子に収まりきらなかったお話などを掲載しています。こちらも併せてご覧ください。



これまでの聞き書き活動

- 2019.10.19-20 聞き書き活動実施に向けたグループディスカッション
- 2020.01.18-19 大熊町での聞き書き活動
- 2020.02.07-08 大熊町での中間報告会
- 2020.07.02 作家 塩野米松先生による聞き書きの講義
- 2020.09.28 環境省による放射線に関する講義
- 2020.11.15 渡部千恵子さんによるオンライン語り部
- 2020.11.29 2020年度第1回 オンライン聞き書き活動
- 2020.12.06 2020年度第2回 オンライン聞き書き活動
- 2020.12.20 2020年度第3回 オンライン聞き書き活動
- 2021.02.28 オンライン成果報告会

全体編集後記

2019年10月から続けてきた聞き書き活動の記録が、このような冊子として形になったことを、メンバー一同大変嬉しく思っております。

皆さんのお話の内容はそれぞれ違いましたが、その中でも多くの方々が「大熊町は自然が豊かで過ごしやすい町だったとおっしゃっていたのが、とても印象的でした。」

東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故によって、大熊町は甚大な被害を受けました。「復興」とはどのような状態を指すのか、その定義すら人それぞれで違うかもしれません。しかし、私たちは聞き書きを行う中で、震災以前の大熊町の様子をすることが出来ました。もしかしたらその震災前の町の姿こそ、大熊町に縁のある皆さんが共通して持てる、心の拠り所なのかもしれません。

私たちの活動によって、大熊町はかつてはこういう町だったのだ、こんなにいい町だったのだという記録を後世に残し、これから多くの方にその記録を伝えていきたいと思ひます。



あじさいプロジェクト

青野りさ、阿部翔太郎、岩田千怜、鈴木愛奈、塚原千智
中川佳子、藤原蓮、町田兼都、松本彩花 (50音順)